

第一章

ただでビールを飲めると言われたのだ。そそくさと帰るわけにも行かない。

草平は、閉店後のマルディグラの店内で、既に出てくる人の輪の中におずおずと入っていった。

マルディグラは、草平の住む街から二つ隣の駅を降りてすぐのところにあるレストランバー——と自称しているが、どちらかというと若者向けに小洒落た内装を施した居酒屋である——で、草平は先週から週二、三日のだいたいた方から閉店までの時間を、ここでのアルバイトに費やすことになった。今のところ彼の仕事はもっぱら皿洗いだ。

店長は他の店も経営しており、滅多に会う事がない。ねむさんと呼ばれているベテランのアルバイトが、仕事の能力を買われてほとんど取り仕切っており、その下で草平を含め九人のアルバイトがシフトで勤務している。草平は今日の出勤で三回目だが、今までシフトが重なったのは四人だけだから、まだ半分の同僚の顔を知らない。面接のときの話によると、学生バイトは草平のほかにもう一人しかおらず、もう少し年上のフリーター、とりわけ、影でこっそりミュージシャンや役者や芸人を目指したりしている人が多いらしい。そういう人たちを応援するのが、店長の趣味のひとつなのだ。

そのマルディグラが今度、新メニューとして地域限定の地ビールを導入することになった。その試飲会をするということで、草平は珍しく、

「シフト入ってないみんなも集まるから、片づけが終わったらホールにおいて」と声をかけられたのだ。

草平がいつものとおりすべての食器を洗い、厨房の掃除を済ませてからホールに出てみると、既に皆が草平を待っている。

「今日は草平くんの歓迎会も兼ねるから」

などと言いながら、草平の手許にあるグラスにビールを注いだ。

草平は、多少の人見知りはあるが、周囲とはすぐに溶け込むくらいの努力はできる。酒も嫌いではないので、中ジョッキをひとつ空けた頃には、先輩たちともすっかり馴染んでいた。特に自己紹介などはしなくとも、彼ら同志の会話を聞いていれば、誰が何と呼ばれているかくらいは、すぐに把握できた。

「お前ら、これ新商品なんだからさ、そんなに飲むなよ」

ねむが、会話の盛り上がってきたバイトたちに声をかける。ただで飲ませてくれるとはいえ、それは「どんなに飲んでも良い」という意味ではないことに、全員がその時になって初めてのように気付いた。

「じゃあ二次会ってことでどこか他の店に飲みに行こうか？」

あんじ、と呼ばれている女の子が提案した。女の子と言っても、彼女はこれの中ではかなり年長の部類かもしれない。いかにもリーダー格といった感じの空気が漂っており、当然のようにほとんど全員がそれに同意した。川崎と呼ばれる男だけが「ごめん、俺は今日はもう帰らなきゃ」と言って皆と店の前で別れたが、結果的には八人が残った。草平と、瀬名と呼ばれる男のほかは、全員が女の子だった。

「ねむさんも行こうよ」

一見おとなしそうなあやこが、しきりにねむを誘っているのを見て、草平も「そうですよ、一緒に飲みましょう」と言ったが、彼はまだ仕事が残っているからといって、事務所に戻っていった。

飲み会は大変盛り上がった。会話もずいぶん弾んだ。草平は、ほとんど初対面の女の子たちと話をする機会など、今まではあまりなかったもので、かなり緊張はしていたのだが、瀬名がいろいろと教え、カバーしてくれたのだ。

「草平って、何歳？」

いきなり呼び捨てにされたのにはさすがに驚いたが、草平は素直に答える。

「二十歳ですよ」

「ああ、じゃあネコちゃんと同じだ」

「ネコちゃん…？」

草平が怪訝そうな顔を見ると、一人の女の子が「私、私！」と名乗りをあげた。確か、芹沢さんという人だ、と草平は思い出した。

「芹沢さんは、どうしてネコちゃんって呼ばれてるんですか？」

「本名だもん。音に子って書いて、ネコって読むの。覚えておいて」

「へえ」

しばらく音子と会話を続けていたところ、草平は意外と普通に女の子としゃべっている自分に気付いた。初めこそ、自分のしゃべっている相手との会話をするだけしか余裕がなかったものの、少しずつ、周りの会話も盗み聴きながら話することもできる。

「だーから、あやこ、ねむさんのことばっか話しすぎ！」

「え、そんなに話してますか？ 私……」

「話してる、話してる。ていうか恋しちゃってるね、もう完全に」

「だめ、そんな大きな声で言わないでください！」

あんじが少し酔った様子であやこのことをからかっているの、草平は少し調子に乗って、話に顔を突っ込んだ。

「そういえば、あやこさん、さつきもずいぶん熱心にねむさんを誘ってましたね」

そういわれたあやこは、顔を真っ赤にして、「ほら、大きな声出すから草平くんバレちゃったじゃないですか！」とあんじに突っかったが、同時にその脇からは、こんな声が飛んだ。

「いいじゃんねー、店内恋愛賛成！」

「さんせーい！」

いつも一緒にいる女の子二人組が、仲良さそうに手を繋ぎながら騒いでいる。二人とも小柄でキャッキヤと話をしている姿はまるで十代の女の子だが、本当は、草平よりは年上のはずだ。彼女たちを横目で見てみると、隣にいた智が、草平にこっそり話し掛けてきた。

「藤宮ちゃんとチヨちゃん、ほんと仲良いよね。店内恋愛って、ひょっとして自分たちのこと言ってるのかな？」

「ええ？　だって二人とも女の子じゃないですか！」

「好きになる気持ちに、性別なんか関係ある？」

「それは……」

「あはは、あの二人については冗談だけどね。二人ともちゃんと彼氏いるから」

「なんだ……驚かさないでくださいよ」

草平は、そう言いながらも、智に少し好感をもった。いつも物静かに働いている印象だったが、意外と気さくで話しやすい。

（本当に、今日はたくさんの人と喋ったな。大学の新歓コンパに無理やり連行されて以来、こんな飲み会は初めてかもしれない。）

草平がそんな風に思いながら、すっかり皆について詳しくなったような気になった時、あんじがふと言った。

「やばー！ もう一時半じゃん」

確かにもうそんな時間だった。とうに電車など動いていない。と言っても、終電も気にせず飲めんでいるほど、皆は近場に住んでいる。問題は、あんじと智の二人が、明日もランチの時間帯からシフトに入っていることだ。時間も時間なので、今日はお開きにしようということになった。

店を出て、草平はとりあえず、歩きだったり自転車だったりタクシーを捕まえたりする女の子たちの帰路を、瀬名と見送った。それから、自分はどうやって帰ろうか、悩んだ。一駅分くらい、歩いてもたいした距離ではない。が、疲れているのでタクシーに乗ったほうが楽だとも思う。しかし、学生の片手間にアルバイトをしている自分には、タクシーなどは贅沢だ。そこで、瀬名がもし自分と同じ方面なら、彼とタクシーを相乗りすればいいのではないか、と思いついた。

「瀬名さんはどっち方面ですか」

草平が訊くと、瀬名は意外にもこう答えた。

「お前んちに泊めてくれないかな」

第二章

何時間眠りつづけていただろう。

完全に覚醒しきっていない脳でもって、奈々はそんなことを思った。

解らない。今はいつなのだろう。私はいつから眠っていたのだろう。あれから、どのくらいの時間が経っているのだろう。解らない。何も、解らない。

眼を開こうと思ったが、どうもうまく開かない。瞼がずいぶん腫れているようだ。泣いているうちに、泣き疲れて眠ってしまったらしい。

鏡を見ると、いつも控えめに畳まれている彼女の奥二重は、分厚く醜い二重となって、顔の表面で自己主張をしている。

「ひどい顔」

呟いた独り言が、決して狭くない——広くもないのだが、一人で暮らすには、かなり広いように感じられる——マシヨンの一室に無機的に響く。

喧嘩したまま家を飛び出した恋人が、昨日の夜、帰ってこなかった。

たった一日帰らないくらいで落ち込むことはないかも知れない。だいたい彼は、朝まで遊んでいて帰らないことなど日常茶飯事のようにあるのだ。が、今度は違う気がした。

一週間待とうが一ヶ月待とうが、彼はもう帰らないような気がする。

(どうして私はいつもこうなってしまうのだろう。)

あの時、彼の傷ついた顔を見て、奈々は咄嗟に「悪気はなかった」と自己弁護をしてしまった。それは、彼が奈々に投げかけた言葉の真剣さに対して、あまりにも軽率だったことは、奈々にはよく解っていた。

「悪気があるほうが少しはマシだよ」

彼は言った。軽蔑するような眼差しでそれだけ言うのと、この部屋を出て行った。

本当は心の底から彼を必要としている奈々にとつて、これはまったく悲劇的といか言いよのない状況だ。しかも、どついうわけか自分でそうなるように仕向けてしまった。

どんどん自分が嫌いになる。

奈々は横になったまま、瞼を開けようとする気力もないまま、自分の胸のあたりをキュッと掴んで、声に出してみた。

「あいつ、もう帰ってこないかもしれない」

最後まで上手く言えた。そうだ、私はそういう女だ。昨日だつて、ユカリはきつと呆れただろう。困惑したかもしれない。

真夜中に電話がかかってきて——奈々だつていつもは滅多にそんな事をしないし、もともとユカリはそういう友達を見て放っておけない性格なのだ——わざわざタクシーで駆けつけてくれたユカリにまで、無理やり笑顔を見せた。

「あいつ、もう帰ってこないかもしれない」

さっきのように言つて、そして奈々は笑つた、はずだ。小さな頃から人前で泣かない子だと言われていた奈々にとつて、それは別に難しいことではなかった。と言つても、笑顔を作る顔の筋肉がかなり引き攣っていたから、ユカリ

の目に上手く笑えていると映ったかは、解らないのだが。

ユカリは、何も言いようがなかったに違いない。そういう顔をしていた。もっとも、責任感も強い彼女の事だ、きつと帰ってくるよ」などと無責任な言葉を使ってなぐさめることなどしない。

ただ彼女は紅茶を淹れ、そしてそこにほんの少しの桜リキュールをたらして、奈々に飲ませた。それはとても美味しかったし、心からあたたまるかのような気にもなった。それで、奈々も少し心が落ち着いた。

だから、あとはいつものように、好きな音楽をかけて、くだらない笑い話をして、リキュールのおかげで少し気持ちが楽になっていたのかもしれないけれど、それにしただけ、ずいぶん元気になった。

けれど、逆にユカリと別れて一人になった途端、堪えていた涙が噴きだして止まらなくなってしまったのだ。

ユカリは奈々にとって、とても大切な友達だ。決して人付き合いが得意とは言えない奈々を、彼女はいつも自分を明るくさせてくれ、食事やショッピングや、その他もろもろの毎日の小さなイベントに付き合ってくれる存在だ。普段は苦手だと思っているとりとめのない長電話すら、相手がユカリである場合に限っては、苦痛ではない。二人でいると、なぜかいつも面白おかしい話ばかりして、笑ってられる。笑顔が増える。お互いが、それを心地よいと思うからこそ、一緒にいられるのだ。

そんなユカリの笑顔を前に、どうして傷ついた顔など見せられるだろうか。ユカリは奈々の傷ついた顔を見れば困るだけだろう。そして奈々は、彼女の困った顔を見るのは哀しいと思う。そんなふうに二人にとってマイナスの感情を生むようなことなら、初めからしないほうが良いに決まっているのだ。

楽しい会話で、楽しい時間を紡ぐことは、内側に抱えている悲しみとはまったく別物として独立することを、改めて知った。

悲しみに上書きできるものなんて、この世には無いのだ。人間の感傷はなんて不便なものなのだろうと思いつながら、
奈々は無気力に横たわった。

いつまでそうしていればいいのか、一人の部屋では起き上がるきつかけすら見つけることが出来なかった。
とにかく、何をする気にもならないのだ。

第三章

説明を求めたほうが良いのだろうか。

あの夜は、「タクシー代は持つからさ」などと言われたのもあって、よく解らないまま、草平は瀬名を家に連れ帰ってしまった。

人を一人泊めるくらい、別に大騒ぎするほどの事ではない。部屋だって空いているのだ。草平は、「ま、仕方ないか」と、どこかで思っていた。というのも、草平の家族が現在離散中だからだ。

複雑な事情があるわけではない。昨年、父親が三年ほどシンガポールに赴任することになったのと、姉が短大を卒業して就職するのと、草平が大学に合格したのが、全て同じ時期に重なったのだ。そこで両親は、子供から手はなれるのをいいことに、二人してシンガポールに行ってしまった。そして、住んでいた持ち家を人に貸し、その賃貸料で草平と姉が二人で住むための2LDKマンションを借りてくれたのだ。

つまり、草平は現在、姉と二人暮らしのほずである。が、実は今、姉はこの家へ帰っていない。半年ほど前から足が

遠のき始め、今ではすっかり帰ってこなくなってしまった。彼女の荷物は少しずつ減っていった、今やベッドなどの大型家具を残すのみである。はつきりとは言わないが、姉に恋人が出来たのは明白だった。草平は、別にそのことを問いただしも、両親に密告することもせず、姉がそれでいいなら自分も気が楽だ、などと思いながら、ZLDKに一人で暮らしている。

そんなわけで、家も広いし、姉のベッドも空いているし、どんな事情があるのか知らないが、瀬名を一晚泊めてやるくらいは、まったく問題ないと思ったのだ。

「広いな、お前ん家！」

玄関を開けるなり驚いた顔を見せた瀬名をとりあえずリビングに通し、草平はそういった自分の家庭の事情を話した。あらためて二人で顔を突き合わせていると、草平は自分が瀬名に比べてずいぶん格好悪いな、と思った。瀬名は背がすらつと高く、顔もきりりと男前で、雰囲気はなにか華やかだ。それでいてとても気さくで、話題も豊富だし、女の子からも相当モテるに違いない。自分とは正反対だから、どこか反感と憧れの混在した複雑な気持ちになる。

姉の部屋の空いているベッドに案内すると、瀬名はすぐに寝てしまった。草平は、もう少し話をして良かったのに、と少し物足りなく思ったが、どうせこれからも機会は沢山あるだろうと思い、自分も床についた。まさか、機が沢山あるどころではなくなるなんて、この時点で草平は予想もしていなかったのだった。

あの夜からずっと——かれこれ十日ほど、瀬名は草平の家に入り浸っている。もう、住んでいると言ったほうが良いのかもしれない。とはいえ、瀬名はマルディグラでの仕事が終わった後でも、また飲みに行ったりクラブで遊んだりしているの、草平の家にやってくるのはたいがい朝方である。草平が大学へ出かけてから、授業を受けて帰ってくるまでの時間、瀬名は草平の家で寝ている。

一番初めにそういった状況になった際、草平は自分が留守の間に瀬名が鍵もかけずに外出してしまったら当然困るので、彼にスベアキーを貸与したのだが、それがいけなかったのかもしれない。スベアキーは、もはや瀬名の所有物のようになってしまっていた。

信頼がおけないというわけではないし、別段迷惑でもない。ただ、だからといって一緒に暮らすという話になった覚えはない。家に帰らない（もしくは、帰れない）事情があるなら、きちんと説明してくれば納得するものを、今のところそういった気配がない。瀬名としては、ここに住んでいるというよりも、単に入り浸っているだけという感覚なのかもしれないが、いずれにせよ草平にとっては同じ事のように思えた。

「おまえ、何か最近疲れてない？」

四限の授業が終わり、家に帰るといつて立ち去ろうとした草平に、伊勢が声をかけた。草平と彼とは同じ学科で、同じ授業をたくさん取っている関係で知り合い、学校では割とよくつるんでいるのだ。

「疲れてるように見える？」

草平は咄嗟におどけて見せたが、確かに自分が疲れていることは感じていたので、意外と鋭い観察眼を持っている友人に今まで以上の好感を持った。

「そついえばバイト始めたつて言つてたもんな。忙しいのか？」

「そつなんだよ。バイトを始めたら、うちに居候ができちゃつて」

「はあ？」

伊勢は、素つ頓狂な声をあげて、少し間を置いてから、草平がそれ以上の説明をしないことを責めるかのように、もう一度素つ頓狂な声で叫ぶように言った。

「意味わかんねえ。話つながってないよ」

友人に私生活の事を話すのはあまり得意ではない草平だが、伊勢は疲れた顔をしている自分を割と本気で心配してくれる種類の友人のような気がしたので、現状について説明した。元来頭の回転が早い伊勢は、ほんの少し説明をただけですぐに草平の状況と気持ちを汲み取った。そして、「その瀬名ってやつに、事情を聞いてやるよ。事情が解ればお前としても問題ないんだろう？」などと、意気揚揚と草平の家へ向かっていった。

飲み込みも早い、行動も早い。草平すら、そのスピードに気持ちの切り替えが追いつけなかったが、とにかく自分の家へ案内することにした。

伊勢を伴って草平が自分の家に帰ると、玄関に見慣れない大きな靴が何足も転がっている。よく注意してみると、姉の部屋から、瀬名と複数の男の話し声が聴こえる。

草平は不審に思い、姉の部屋のドアを叩きながら「瀬名さん、瀬名さん！」と、やや大きな声を出して呼んだ。瀬名はすぐにドアを開け、伊勢の姿を認めると、草平に向かって言った。

「おお、お前の友達？」

既に家主のような風格である。草平は上司に芳しくない仕事の報告をするサラリーマンのように多少うなだれながら答えた。

「そうです、大学の同級生で……」

「どうも、伊勢ッス」

覗き込むと、瀬名の周りには男子高校生が三人ばかり、すっかり寛いだ様子で座り込んでいる。

草平は訝しがりながら、瀬名に訊いた。

「こちらの方たちは？」

「こいつ、椎名優希。実家が近所で、昔から妙に俺になつてゐる変なヤツ」

瀬名のすぐ隣にいる、見るからにナイーブそうな、色の白いひょうつとした男子高校生が、ペコリと頭を下げた。

「で、あと二人は？」

「優希の友達。なんだっけ？」

「こっちがゆうしん。こっちが浅見」

眼鏡の子がゆうしんで、坊主頭の子が浅見というらしい。がしかし、この際草平にとって彼らの名前など関係ないのである。

「何をしにこちらへ？」

草平が、あくまで冷たい態度を貫こうとしているのは明らかだった。その冷たさに押されて、ゆうしんは後ずさり、浅見は「ぼ、ぼくは優希に付き添って来ただけです」などと答えている。

すかさず、伊勢が二人を追及して言う。

「じゃあ、用があるのは、その繊細そうな少年だけか？」

伊勢は普段は穏やかな顔をしているが、何しろ野性的な風貌をしているので、少し睨みを効かせるだけで、怖い顔になる。

「どついつい」用件で？」

草平も負けじと、口を出した。彼もまた、目が悪いのに矯正していないせいで、普段から目つきが悪いと言われている。その目で彼らを睨むと、付き添いで来た二人の顔に緊張が漲った。

もとより、優希はやたら緊張しているようだった。あまりに緊張しているその顔を見ると、草平も責めるばかりで

は可哀相だと思い、一転して外向けの笑顔を見せた。

「まあとにかく座つてよ」

草平の住むマンションがいかに広いと言っても、一部屋に男が六人も集まれば、かなり空気がむさくるしくなる。草平は、とにかく皆にお茶でも出そうと思った。が、よく考えると湯飲みが五つしかないのも、もてなしをするのは辞めて、床に胡座をかいた。

「実は、草平さんにお願いがあるんです」

妙な空気の中、思いつめたような顔で優希が口を開いた。

「自分も瀬名さんと一緒に、ここでしばらく暮らしたいんですけど」

突拍子のない優希の不意打ちに、草平は思わず言葉を失った。その代わりに伊勢が、今日来た本来の目的も兼ねて、言う。

「瀬名さんって人は、そもそも頻繁にここに泊まりにきてるだけで、ここで暮らしてるわけじゃないだろ」

伊勢に言われて、瀬名が、意外だというような顔をした。草平すら、この男子高校生の件で混乱していて、瀬名の問題を忘れていたくらいだったから、当然かもしれない。

「頻繁に泊まりに来てるのと、暮らしてるのって、そんなに違うか？」

瀬名の言葉に、伊勢は明らかにムツとした顔をした。

「違うだろ。だいたい、ここはあくまで草平ん家だし」

「だから、優希も俺にじゃなくて、草平に頼んでるんだろ」

草平は、もはやこんな問答は無駄にしか思えなかった。暮らすという定義が違っているのだから仕方ない。面倒なので、とにかく優希だけは帰らせるべく、言った。

「ひょっとして家出少年なの？　だとしたら、荷担なんかしないよ。誘拐とか言われたら厭だし」

「大丈夫です、ウチの親は俺がいなくても別に心配しないでし、友達の家に泊まってるって言っておきますから」

「そこまでして何でここに暮らす必要があるんだよ？」

「瀬名さんは昔から僕の師匠みたいなもんで、もっといろいろ教わりたいと思ってたんです。サーフィンとか、夜遊びとか。僕、来年には受験生になるし、いろいろできるの今しかないんですよ」

草平は、伊勢と顔を見合わせた。呆れているのは自分だけではないというのが確認しあうような顔をしている。

「まあ、遊びたいてのは俺たちの知ったことじゃないし、勝手にすればいいけどさ」

「そもそも、瀬名さんはここに暮らしているわけじゃないってのが問題なんだよ。ただ、泊まりに来るだけだし」

「うん。瀬名さんが自分の家に帰って、君もそこで暮らせば良いんじゃないの？」

「いや、そのことなんだけど」

次々と優希に畳み掛ける二人を遮ったのは、申し訳なさそうな顔をした瀬名だった。

「俺、今ちょっと訳あって自分の家に帰れないんだ。しばらく、ここに住むことにさせてもらえないか？　少なう家賃も払うし」

「家賃とかの問題じゃないんですけど。……なんで自分の家に帰れないんですか？」
ようやく草平は以前から疑問に思っていたことを口にできた。

「事情があるなら、話してくださいよ」

瀬名は黙り込んでしまった。深い事情があるのかもしれない、と草平は思った。

「近所の人と折り合いが悪くて追い出されたとか？」

「借金取りに追いまわされてるとか？」

「押入れに腐乱死体が隠されてたり？」

「あ、解った。ヤバイことに関わって悪の組織に追われてるんだ？」

「ってどっという世界の話ですか！」

いつものノリで脱線した草平と伊勢の会話に、思わずゆうしんが突っ込んで、皆が笑った。こんなことを話している場合ではない。草平は思ったが、もはや和やかになってしまった雰囲気の中で、瀬名に真実を訊くのは、不可能のように思われた。

瀬名は、暗い表情で黙り続けた。

第四章

「ねえ」

未樹が、トマトソースの Pasta をフォークに絡めたまま、手を止めた。

「あそこにいる男の子、ほら、しょう君に似てない？」

そう言われて、美咲は大きなガラス窓から通りを見下ろす。

この店は、ちょっとした裏路地に入った飲食店ばかりがテナントに入ったビルの二階にあるイタリアンレストランで、安くて旨い、おまけに会社からすぐ近くであるという条件が揃っている。美咲たちのお気に入りだ。少し残業をこなした後、同僚と連れ立って軽くワインなどを飲みに行くのに丁度良いランクの店だ。ただし、周りにラブホテルや風俗店ばかり林立しているという立地条件に目を瞑れば、の話だが。

もっとも、普段の美咲は寄り道などせずに、なるべく早く家に帰っている。友人との食事は、同棲している恋人から、あらかじめ「今日は仕事の飲み会で遅くなる」という連絡があった時にのみ楽しむべきものだという頭がある。そのくらい、美咲は彼に夢中なのだ。

雑居ビルの二階から見下ろした人もまばらな雑踏の中で、未樹が指さした（正確に言えば、フォークの先で示した）少し目立つくらい長身の青年は、よく見ると確かに美咲の恋人、しょうに間違いなさそうだった。

だから、美咲の顔は、明らかに曇った。

「本人だわ」

「え、まさか」

未樹は慌てた。彼女は、本当にただ似ている人が歩いていると思ったから、そう言ったただけだったのだ。

なにしろ、未樹にとつて『しょう君』は、美咲を迎えに来たところを一度だけチラと見たことがあるだけの人だったし、すぐ斜め下を歩いてゆく彼についてはバツと見ただけで、『しょう君』とは、背が高いところと、何となく全体的な雰囲気似ている、というくらいにしか思わなかったのだ。

まさか、美咲の恋人が女の子と手を繋いで歩いているなどと、思いつくはずもなかった。

「そ、そっくりさんだよな？」

弁解をする気は無いが、大切な友達が傷つくのを平気で見ることができない。そうであって欲しいと心から思ったので、未樹はそう言った。

しかし、美咲は表情を全く変えずに答えた。

「うつん、あれは本人。間違いない」

美咲が彼を見間違えるわけが無かった。だって、あのネクタイ。確かに今朝、彼があのピンク地にブラウンのギンガムチェック柄が入ったネクタイを結んでいたところを、美咲ははっきりと見ていたのだ。そもそも、そのネクタイは美咲がしゅにプレゼントしたものだし、彼によく似合うといつも褒めているものだ。

「あの……なんていうか……」

美咲が泣き出したり激昂したりしないので、未樹は、逆に動揺してしまった。何か言ってくれば、励ましたり、上手いことを言って場の雰囲気を和ませることも出来るかもしれないのに。美咲が何も言わない限り、自分が行動に

出てはいけない、と未樹は思う。何を言っても墓穴を掘るだけになるだろう。知らないことは口にしないほうがいいのだ。

もっとも、美咲が黙っていたのは、どう反応したら良いのか解らずに、ただ呆けているしかなかったからだ。申し訳ないが、未樹のことを考える余裕もなかった。これから、自分は食事を終えて、彼と住む家に帰る。彼も、少し遅れて帰るだろう。その時、どうすれば良いのだろうか。彼に、自分が見たことを話すべきだろうか。彼は、何と答えるだろう。修羅場を迎えることになるのだろうか。

美咲は不思議な気持ちでその場面を想像した。

彼に対して怒りをあらわにするのは、ずいぶんしづらいことのように思えた。美咲自身、初めて彼に声をかけられたとき、見知らぬ女性に簡単に声をかけるその男を、全く信頼していなかったはずだ。携帯のアドレスだけ教えてたが、後から何度もメールが届いたので、仕方なく一度会ってみただけだったのだ。

それが、いつのまにか恋人同士になって、一緒に暮らすようになったのだから、男女関係というものは解らない。

始まりがそんなものだから、終わりだってそんなふうに訪れるものなのかもしれない。美咲が今までにそういう恋愛を経験した事がないだけなのだ。

そんなことを考えてぼんやりする美咲と、ただおろおろしている未樹の間に、突然割って入る声飛び込んできた。

「あー、おまえらも来てんだ？」

「松尾さん！」

未樹は良いタイミングでやってきた助け舟に、救われた気持ちになった。

松尾は、未樹と美咲が所属する課の一年先輩だ。いつもならば、知った顔が同じ店にしようが、興味なさそうにし

ているような、冷たいというか単純に他人にあまり興味を示さない人である。それなのに、松尾のほうからこんなふうに声をかけてくるなんて。今日の彼は、珍しく機嫌が良いに違いない。

しかし、救われた気持ちになったのは末樹だけだった。美咲のほうは松尾が声をかけてきたのにも気付かない様子で、黙ったまま、ただ自分の恋人とその隣の女の行く先を目で追う。

美咲は、もはや不安ですらなかった。

不安というのは、絶望になるかならないか、今はどちらに転ぶかわからない、という段階で感じるものであって、美咲の場合はもうそれにあてはまらない。

仮に、自分の恋人が他の女の子と何か事情があつて（どんな事情があつたらそのような状況になるのかは知らないが）、たまたま手を繋いでいるというようなことだったら、まだ許せるかもしれない。けれど、彼らが手を繋いで歩いているのは、偶然ではない。

だって、この路地を入った先には、ラブホテルと風俗店しかないのだから。

隣を歩く彼女を凝視する。中肉中背で、黒目がちな眼が印象的だ。服装や雰囲気から言つて、とても風俗関係の女性には見えないし、その立ち居振舞いを見ていれば、彼らはすでに対等に男と女の関係を築いているのが解る。もはや疑いようもない。

美咲は、彼が女とすぐ斜向かいのホテルに入っていくところを、最後まで見ていた。

「おお」

美咲の視線が追っている先に気付いた松尾が言う。

「若い男女が吸い込まれていくなあ」

視線には気付いても、状況には気付いていないかのような呑気な口調である。

そう言われてはじめて、美咲は松尾がそこにいることに気がついた。別段、驚きもしなかった。世界では、色々な事が起きているのだ。自分が気付かないだけで。

「もう、松尾さん、ヤラシィんだからー」

ただそう言って、美咲は他人事のように笑った。未樹もようやく、少し安心したように微笑んだ。

第五章

その店のドアは全面ガラスだったので、奈々は店に入る前に自分の全身をチェックすることが出来た。

大丈夫。自信を持った顔をしていれば、背筋を伸ばして堂々としてさえいれば、何も問題は無い。

ガラスに映った自分に、奈々は言い聞かせる。

実際、怯んだり緊張したりしなれば、長身で細身で涼しげな顔立ちをした奈々は、まるでファッションモデルのように見えなくもない。彼女の恋人がそれをよく褒めてくれていたから、奈々は特にクールな服装を好むようになっていた。気合を入れて、服をコーディネートし、ほんの少しメイクをよそ行きにするだけで、もう完璧だ。

だいたい、ここは初めて入る店というわけでもない。何度か、恋人に連れてきてもらったことがある。一人で入ったことがないというだけの話だ。けれど、一人で入ってはいけないような店ではない事は知っている。怖いことなんて、本当に何も無いのだ。

心の中でそれだけ言っていると、奈々は自分では押した事のないガラス張りの大きなドアを押した。意外な重みを感じた。

「いらっしゃいませ」

バーテンダーが奈々に気付き、明らかに作ったような上出来の笑顔と、思いのほか大きな声で彼女を迎えた。が、その声が目立ってしまふほどは、ここはもの静かな感じの店ではなかった。店内は、一般的なショットバーらしい薄暗さの中で、割と大きな音量で音楽が流れている。そういう中で繰り広げられる人々の声は、重なり合つてざわめきとなつてはいたが、決してうるさいと感じるようなものではなかった。もちろん、静けさとは縁が遠いようではあったが。

奈々は、まずは店内を見回した。

二十代前半くらいのカップルや少人数のグループが、アルコールを摂取しながらそれぞれに会話を楽しんでいるが、恋人の姿はここにはない。

軽い落胆と、同時に思いがけない安堵を覚えつつ、奈々はとにかく一杯のカクテルを飲んで帰ろうと思った。

カウンターには、一人で来ていると思われる客も数人いる。奈々は、自分もそこに座るべきだと考え、カウンターの右端で空いていた、やや高いスツールに腰掛けようとした。すると、奈々のすぐ後にやはり一人で店に入ってきた女の子が、隣のスツールに腰掛けようとしている。彼女と目が合う。

身長はかなり高いと自覚している奈々が見上げるほど、彼女は背が高かった。170cmはありそうだ。少々驚きながら思わず見とれていると、彼女のほうから声をかけてきた。

「こんばんは」

随分と人懐こい笑顔である。奈々はつられて微笑みながら「こんばんは」と小さな声で言い、スツールに腰を落ち

着けた。

奈々は、とりあえずジン・トニックをオーダーしようと思っていたのだが、隣の彼女が先にジン・トニックを頼んでしまったので、なんとなく真似をするように気恥ずかしく、「ジン・バック」とバーテンダーに伝え、それから店内をゆっくりと見渡した。

（何度探したって、いないんだ）

自分の恋人は、とりあえず今日はここには来ていない。きっと、まだ会うべきではないということだろう。奈々は、カウンターに向き直る。

やがて、先ほどの作り笑いの上手いバーテンダーが二つのグラスを持ってきた。奈々の前に、ジンバックの作られたグラスが置かれる。それから、隣の席の彼女にはジントニック。

何となく見上げると、彼女は待っていたように奈々の視線を受け止めて、グラスを突き出した。

「かんばーい」

「あ、はい。どうも。乾杯」

奈々は動揺しながらも、グラスを合わせる。

「この店、はじめてですかあ？」

彼女はあくまで気さくに話し掛けてくる。

「は、はい。いえ、一人で来るのは初めてだけど、何度か来たことはあります」

「私はね、すぐ近所で働いてて、仕事帰りによく立ち寄るんだ。しょっちゅう来てるから会ったことあるかも」

「はあ」

「あ、名前なんていうの？」

「岡崎……奈々です」

「奈々ちゃん。私のことは、かおりんって呼んで」

「あ、はい」

彼女の勢いに押されながらも、奈々も自分がすっかり愛想笑いをヘラヘラと浮かべていることに気付いて、反射的に気持ちを引き締めた。私は、彼を探しているのだ。友達を作りに来たわけじゃない。そうだ、彼を探しているのだ。この店は、彼が気に入ってしばしば来るショットバーなのだから。

そして、このかおりんと名乗る彼女もまた、この店の常連だと言う。何度かこの店に来た事のある奈々と、会ったことがあるかも知れない、と言っている。ならば、しばしば来ている彼とだって、会ったことがあるかも知れないではないか。

「あの、かおりん……さん？」

「さん付けしなくていいよ。敬語もやめてね」

「あ、はい。えっと……、かおりんは、この店の常連、なんだよね？」

「うん、まあそうかな」

「それじゃあ、ひよっとして、あの」

奈々は、一度唾を飲んでから、思い切って彼の名前を言った。

「瀬名くんって、知らない？」

「瀬名？」

かおりんは、オーバーに目を見開いた。

「知ってる知ってるー。てゆーか友達だよ。昨日も一緒に飲んだ」

「こともなげに、かおりんはそう言った。

「そうなんだ？ ……元気だった？」

「うん、アイツはいつつも元気だけだねー。昨日もここ出てからまた近くのクラブに遊びに行くとか言ってたし。ていうか、奈々ちゃんも瀬名の友達？」

「ん、まあね」

「連絡先知ってるよ。教えてあげようか」

「ううん、連絡先は知ってるの。ただ、いるかなーと思ったただけだから」

奈々はそう言っ、いつの間にかほとんど中身のなくなったグラスを傾けて、最後の一口を飲み、立ち上がった。

「じゃあ、私これからちよつと行くとところがあるから」

「えー、そうなの？ じゃあまた会えるといいね。ばいばい」

かおりんは最後まで明るく奈々を見送った。

瀬名が元気であることが解つたのは、奈々にとっては嬉しくもあり、哀しくもあった。生活の中に奈々がいようがいまいが、彼には関係ないのかもしれない、などと思ってしまう。そういうふうにならなくても考えてしまつところが、今回彼を追い出してしまった原因とも言えるのに、こんなふうを考える癖は治りそうになかった。

ただどやっぱり、遠くにいても、二度と会えなくても、彼が元気でいてくれさえすれば良い、とどこかで思う。かおりんに言つたとおり、連絡先なら知っている。携帯の番号も、メールも、知らないはずがなかった。大体、それらが解らないとしても、確実に会える場所を奈々は知っている。それは他でもない、彼が働いているマルディグラという店だ。毎日働いているわけではないが、二日に一回は働いているはずだから、いつ来るか解らないショットバ

ーにいたるよりも、会える確率が高い。そんな事は初めから解っていた。けれど、奈々はそうはしなかった。

心の殆どは彼に会いたいという気持ちで占められているのに、今は「会ったところでどうすればいいのか解らない」という不安のほうが大きい。会えるか会えないか解らない、そういう状況の中で偶然会えたら、その時はきっと自分の背中を少し押してくれる勇気がどこから湧いてくるのではないかと、信じているのだ。

奈々は、行く宛てもないのにフラフラと夜の街を徘徊しはじめた。たった一つの偶然を求めて。

第六章

「最近、椎名くん変わったよね」

隣の席の里美が突然声をかけてきたので、優希は飛び上がるほど驚いた。

そもそも女の子のほうから声をかけてくるなんて、優希にとってはそれだけかなり特異な出来事なのだが、ましてや、その相手が里美だなんて。

勿論、彼女は隣の席であり、今は自習とはいえ授業中であり、単なる暇つぶしに話し相手にさせられている可能性はある。それはもう十分にある。

しかし、隣の席であるにも関わらず、優希は今までほとんど里美と会話をしたことがなかったのだ。それは、彼女が一見大人しそうに見えるから、というのもあるけれど、むしろ、彼女がかなりおしゃれにこだわっている感じのする可愛い女の子で、優希にとって高嶺の花といった感じがするからである。

「そ、そう？ どこが変わったかな？」

内心は飛び上がりんばかりの状態だったが、きわめて落ち着いたふうに着て、優希は答えた。もっとも、慣れないことなので声はうわずっているのだが。

「なんかちょっと垢ぬけたってかんじ」

「ほ、ほほほ本当？ いやあ、最近夜遊びとか覚えちゃってさ。すげーカッコよくてガンガン遊ぶ先輩がいるんだ」

優希がそう言うつと、里美はすこし白けた顔になった。

「なあんだ。彼女でも出来たのかと思った」

「えっ！」

「そのくらい、なんか、良くなったよ。でも、ということは……まだ……なんだ？」

里美が首を傾けて、含むように言う。

うつすらと笑いを浮かべた顔に、セミロングの長い髪がかかって、意外な色っぽさに、優希の背筋はゾクとする。あまりものを深く考える余裕もなかったので、つい成り行きに任せて答えてしまっ。

「いやあ、まだまだ童貞っすよ」

「はっ」

里美はうつすらと笑いながらも、怪訝そうな顔をした。

「別にそういうこと訊いてるんじゃないんだけど」

「え？」

優希もきよんとする。

「だって『まだ……なんだ？』なんて言われて、他に何があるっていうの？」

『まだ、りさのこと好きなんだ？』

今度は、あらぬ誤解をされないように、里美もはっきりと言う。

優希としては、意外な方向から槍が飛んできて、心臓が止まる思いだった。

「なんでそんなこと知ってるの！」

授業中なので、声は出せない。その分、優希はオーバーな表情でその驚きを表してみた。里美は、その顔が面白かったのか、見て小さく笑った。

「結構有名。椎名くん解りやすいから」

「いや、そんなの昔の話だよ。今は全然。まじで、関係ない」

りさは、優希が一年の時のクラスメイトだ。特に美人でもない普通の女の子だが、とても明るくて、よくバカな話をして笑いあっていたものだ。ウマが合う、とはこういうことを言うのかもしれない、と優希に初めて思わせた女の子だった。

二年に進級して、りさとはクラスが離れた。そうやって初めて、クラスが一緒でもなければ、特に会話をする機会もなくなってしまう程度の関係だったのだと気付いた。

それが、割と寂しかったので、そうか、あれは恋心のようなものだったのだ、と思った。そして、今はただそれだ

けだ。と、優希は思う。

恋心のようなものだっただけとあって、別にどうなるわけでもなかった。りさとは会話もしない関係になってしまったし、おまけに、今はもう、りさには彼氏がいる。同じく一年のときに優希と同じクラスにいた佐藤遼太。認めるのは癪だが、ジャニーズ系でかなり可愛い顔をしていると女子には評判だった。確かに、顔だけ見れば、文句の付けどころがない。性格も、まあ良いかも知れない。

頻繁に会話をしていたころ、りさは優希にも、佐藤のことを「カッコいい」などと話していた。ただ、佐藤はきわめて大人しくて目立たない存在だったので、優希はまったくかをくついていたのだ。いや、どちらかというと、顔は良いのにあれほどモテない奴も珍しい、と小馬鹿にすらしていた。だから、りさのほうで、そんなに本気になっているなんて、まったく気付いていなかったのだ。

あの大人しい佐藤が、りさと仲良くなるはずがない。「優希って、いつちばん話が合う友達」だと言われたこともあるし、りさと一番近くにいたのは優希だった、はずだったのだが。

「友達」という言葉が、本当に「友達」という意味だったことに、優希が気付いたのはずっと後の話である。

りさが積極的に近づいていくに連れ、佐藤は自然と、少しずつ心を開いた。気がつけば、二人は恋人同士だった。それも、二年でも里美と同じクラスになった友達の浅見から聞いただけの話だ。

少し考えるようなそぶりを見せた後、里美が思い切ったように言った。

「りさ、佐藤ちゃんと別れたってよ」

「え？」

「やっぱ、知らなかったんだ？」

里美はけしかけるような眼で優希を見つめた。

「だから、もう関係ねーもん」

優希は少しうつろたえながらも、きわめてクールに装った。もつとも、頭の良い里美にはそれがあくまで表面的な装いであると解っているのだろうが、それでも取り繕わなければならないことが、男にはある。

瀬名先輩だったら、こんなことでいちいちうつろたえないんだろうなあ、きつと。と、優希は思う。

終わった恋なんて、いや、恋「のようなもの」なんて、いつまでも引きずっている男なんて、情けないぜ。今年の目標は、なんとしても重貞卒業。はつきりいって、今はそれ以外考えられない。

この前、瀬名さんについて夜遊びに行つて、かなりいい感じの女子大生と、惜しいところまで行つたんだ。今度チャンスがあつたら、そのときは確実に……。

そんな決意を新たにした優希の凜とした表情を見て、おそらくその意図を勘違いした里美は、優希を励ますように深くうなずいた。

「がんばって」

第七章

瀬名はともかく、優希の侵入まで断りきれなかったのは、草平の気の弱さゆえ、というわけでもなかった。

端的に言えば、草平は「まあ、アリかな」という程度に肯定したのである。

草平の姉が、個人的な事情により本来住んでいるはずの家にいない。その空いている空間に、個人的な事情により、瀬名が入ってくるというのは、どこかしらバランスが取れている話のように思えた。優希については少々戸惑ったものの、要は瀬名の遊びについてまわりたいだけだし、ちょっと話をしてみれば、別に迷惑に思うほど彼が子供でもないことが解った。それに、草平自身、一人で居るとどうでも良いことにくよくよと悩んだりしてしまうタイプの人間であるので、同じ家に他人がいることで救われたりすることも、幾分かはある。おそらく世の中の過半数がそう断言するであろう通り、家に帰って誰かがいるということは、精神衛生上悪くないのだ。

総じて、特に悪いというほどのことは無いではないか。ともかく、奇妙な共同生活が始まることになってしまったことは事実なのだし、もうそれは現実が始まってしまっているので、否定的に捉えても仕方のないことである。

マルディグラでの人間関係も、必然的に変わった。

草平は、他人に興味がないわけではないが、なかなか積極的に関係を築くことができない。だが、瀬名を通じて、することもなかったかもしれない会話をしたり、自分一人では知りえなかったかもしれない情報を得ることが多くな

った。何事も受身で生きている草平とは違って、瀬名は自分から積極的に何かを掴むバイタリテイのある人間のような。学ぶところが多いと言えるほどである。ただし、それは感心できることばかりでもない。

たとえば、

「お前、仕事上がるときいつもゴミ出して帰るだろ？　その時、たまに浮浪者いない？　夜でもサングラスかけてる変なヤツ」

「あ、あの丸いサングラス？　見かけたことある。すごい異臭を放ってた」

「あいつ、マルディグラが出来る前にここに事務所があった会社を辞めさせられた恨みを晴らすチャンスを窺い続けて、八年も前からずっとあの辺りをウロウロしてるんだってさ。ちなみに、名前は辻幸太郎って言っんだけど、かなりやばい人だから、近づくなよ」

「っていつか瀬名さん、どこからそういう情報を仕入れるわけ？」

と、思わず草平がそんなふうに言いたくなるようなことまで積極的に情報収集しているのだ。草平にとっては、そんなことを知って一体何になるのか、と疑問視してしまうようなことを、彼は沢山知っている。

しかし、それはまだ良かった。

逆に、いつのまにか周りが草平の私生活について知っていると、いう妙な状況も出来てしまい、少し困っている。

「草平くん草平くん」

ある日の仕事中、草平に、芹沢音子が突然声をかけてきた。草平は未だに洗い場専門なので、仕事中に草平に話しかけるには、わざわざそのために洗い場へ出向く必要がある。草平は、見た目が非常に女の子らしい割には、よく笑い、また人をよく笑わせる会話を心得ている音子を、バイトの中で唯一の同い年ということもあって、なんとなく

く好感を持っていたので、いったい何事かと思って緊張もしたし、嬉しくも思った。

「どうしたの？」

きわめて自然な感じを心がけて、音子のほづを振り向くと、音子は目をららんと輝かせて言った。

「草平くんって、クラリアスベルト好きなんだって？」

「え？」

クラリアスベルトというのは五、六年前に流行したバンドの名前である。草平は別にそのバンドがものすごく好きだったというわけではなかったが、流行っていて何となく耳についたので三枚ばかりアルバムを買った。よく聴くCDは自分の部屋に置いているが、普段聴かないものは部屋にあっても邪魔なので、リビングの大きなボードにしまっている。クラリアスベルトのCDも、リビング行きとなったまましばらく忘れ去られていた存在なのだが、おそらく、瀬名がそれを見かけたのだろう。

何もそんなこと人に喋らなくても良いのに、と草平は少し戸惑っていると、音子は今までにも増してニコニコしながら言う。

「私も中学のときすごいハマってたんだ。やっぱり同じ年って感じだね」

今さら「別に好きではない」とも言えない草平は、愛想笑いでその場をしのいだ。音子には好感を持っていたものの、また会話をするときにクラリアスベルトの話題が挙がるのかと思うと、少し気が重い。

またある日、マルディグラのバイトの中ではほとんど店長代理扱いされているねむの次に信頼を置かれている川崎から突然、

「草平の家の隣に住んでる女子中学生、なんか可愛いらしいじゃん」

などと言われて驚いた。

草平の家の隣には、確かに中学生くらいの子供がいる家族が住んでいる。姉は女の子と時々会話をするらしく、時々そんな話も聞いたが、姉がいなくなってしまうてからは何の繋がりもなくなってしまうたようなものだ。草平自身はその中学生をチラッとしか見たことがないし、可愛いかどうかなどよくわからない。むしろ、まったくの初耳である。

「今度遊びに行っている？」

などと耳打ちされて草平が苦笑したのは、信頼していた川崎が、女子中学生が好きだという少し意外な趣味を知ってしまったというだけの理由ではないのだ。

草平はいつしか、瀬名をある意味恐るべき存在のように思うようになっていた。

小中高と大学に至るまで、関わるコミュニケーションの中で常に「特に目立たない存在」として存在してきた草平は、マルディグラの中でのみ、私生活の意外な裏側を皆に知られる存在になってしまったのである。

第八章

考えてみれば、自分は本当にしよこのことを好きだったのか、解らない。いや、確かに好きだったはずだ。何かに取り憑かれるように家を出てしまったとき、自分の中には、確かに情熱があった。優しそうな顔をして、時々冷たく突き放すしよを、ずっと独り占めしなければいけないような気がしていたはずだ。

あの感じは一体なんだつたんだろう。どこへ行ってしまったんだろう。そんなことを考えながら、美咲は泣く気にもなれない自分に驚いていた。

浮気がばれたと解った途端、しよふは開き直った。悪びれもせず、浮気相手との事を一切切喋り、仕舞いには美咲と住んでいるアパートにまで彼女を呼んだ。二人が対面したその場で、彼は、美咲と彼女とのどちらかを選ばなければならぬのなら、間違ひなく向こうの彼女を選ぶ、と言った。

そんなことを言われなくとも、目の前に現れた浮気相手を見れば、彼女の優勢は一目瞭然だった。彼女は、とても印象的な強い目をしている。まるで、それが揺るぎない自信を持つている証拠のように、美咲の心を追い立てようとしていた。その目を一目見ただけで彼女の優勢を確信した美咲の中ではもう、しよふにすぎりつくほどの勇氣も、思ひの強さも薄れてしまったのだ。

荷物を纏めている間は、美咲にとって現実的につらい時間だった。けれど、出てきてしまったからには、もう大丈夫だ。人間、覚悟さえ決まれば自分を殺す事だってできるように出来ている。あとはいくらでも、どうにでもなるものだ。少なくとも、美咲にはきちんと帰るべき家があるし、おとなしいが少しは頼りになる弟もいる。友達もいる。恋愛は、またしかるべき時にやってくる。

ひとつ気がかりなのは、浮気相手——いや、しよふの新しい彼女と言ったほうがいいのだろう——が、美喜という名前だった、ということだ。美咲の親友の末樹と、字は違えども同じ名前ではないか。

これはあまりにも皮肉すぎる、と美咲は思った。いくら忘れようとしたところで、自分の親友の名前を呼んでしまったら、そのたびにあの印象的な目を思い出し、ひいてはしよふのこと——冷たくされたことも、優しかったときのこと、二人で楽しく過ごした時間も——を、思い出してしまいそうだ。

ただ、そんなことは心配しても仕方ない。なるべくなら、毎日をお祭り騒ぎみたいに過ごして、早いところ、もっと楽しいことを見つけたらいいのだ。

美咲は普段から割りと人に頼らず淡々と一人で過ごせるタイプだが、さすがに今回ばかりは、弟と二人の生活では少しばかり暗くなってしまうような気がする。なるべく友達と外に遊びに行ったり、友達を家に呼んだりするようにしたい。とにかく賑やかに、やり過ごしたい。今や、美咲の願いはそれだけだった。

そして、美咲は自分の帰るべきマンションのドアの前に立った。

合鍵は持っているが、何の連絡もせずに帰ってきてしまったので、一応インターフォンを鳴らす。

ピンポン、と機械的な音が響いて二三秒。中からバタバタとドアを開ける人の足音が聞こえる。美咲は妙に思った。年の割に妙に落ち着いた弟にしては、ずいぶん軽快な足音なのだ。誰かお客さんを待っていたのかしら。などと美咲は呑気に考えていたが、ドアの中から見知らぬ一人の少年の顔が現れて、うろたえた。

「えっ？」

相手も、同じくらい驚いているようで、目をぱちくりさせていた。言葉を発する事を忘れてしまったかのような顔をして。

（この神経質そうな痩せた少年は、弟の友達だろうか。どう見ても高校生くらいにしか見えないけれど。それに、友達だからってどうしてインターフォンに反応して出てくるのだろう。間違いなく、ここは私の家だ。ちゃんと表札には岡部、と書いてあるし……。）

美咲は一瞬にしているいろいろ考えた。

優希のほうは、

（草平さんトコに女の人他突然尋ねてくるなんて。ボーっとしてるように見えて、こんなお姉サマ系の彼女がいたなんて！やるな、草平さん！）

などと、目をらんらんとさせた。

「残念ながら、草平さんは今日はバイトです。夜遅くまで帰らないッスよ」

「ああ。そうなの。アイツ、バイトなんて始めたんだ？」

やっぱりここは美咲の家のような。留守番をしていると思いきこの少年が何者なのか、悩んでも仕方ないので、とにかく家でお茶でも飲みながらゆっくり聞くことにしようと思い、美咲は家の中に入っていた。

優希は慌てた。

「え、このまま深夜までここで草平さんのことお待ちになるつもりッスか？」

「そういう訳じゃないんだけど……」

そう言いかけながら、美咲は自分の部屋のドアを開けた。いつも何事にも動じない美咲であるが、ここで飛び込んできた光景には、さすがに飛び上がって驚いた。

「なんで、私のベッドで知らない男が寝てるの？」

瀬名が、その気配に目を覚まして、「な、何」などと起きぬけの声で言いながらも、すぐに状況を理解した。

「ひょっとして、草平のお姉さん」

「そうだけど」

美咲は、別に怒ってはいなかった。というよりは、怒る気分にもなれなかったと説明したほうが正しいかもしれない。

自分のベッドに布団も敷かず寝ている男。そのベッドの傍らには、抜け殻となっている寝袋（おそらく、自分を出迎えた少年のものだろう）。部屋は別に汚されているわけでも、勝手に手を加えられているわけでもない。彼らは、最低限の荷物だけ持って寝泊りしているという感じであり、特に害もなさそうだ。

（私が勝手に男に入れ上げて、出て行ったまま家を放置していたのだから、こうなっても文句は言えないか。）

美咲は、小さくため息をついた。同時に、自分でも驚いたことに、僅かだが口角が上がった。

図らずも微笑んでしまった美咲は、自分の今の状況を改めて省みた。

あとで詳しい事情を聞くにしても、草平がある程度信頼を置けると思つて宿を貸しているからには、そんなに怪しい人ではないだろうし、まあいいか、などどこかで楽観的に思っている。美咲は、自分はまだあまり周囲に流されないタイプなので、こんな状況でも、それなりに生活できる自信もあった。

インターフォンを鳴らす直前まで強く願っていたことを、美咲は改めて思い返す。

『とにかく賑やかに過ごしたい』

ひよっとしたらこれは、美咲の願いがあまりに早く神様に届いたということなのかもしれないのだ。

これはもう、楽しむしかない。

第九章

（なんだか、今日は家が賑やかだな）

草平は、玄関を開ける前に確かにそう思った。しかし、バイトから疲れて帰ってきたところで、あまり想像力の働くような状態ではなかった。想像力を働かせたにしても、瀬名が優希が友達を連れてきているのだろっ、というくらいにしか思い浮かばなかっただろう。

玄関を開けて、女の子の笑い声が聞こえたときにも、草平は「ああ、これは優希ではなく瀬名だな」と思ったくらいで、何も疑問に思わなかった。しかし、リビングの目の前まで来て聞こえてきた会話から、草平は顔面蒼白になった。

「だからさあ、考えてみれば、初めっから冷たい男だったんだよねえ。なんで、いつときの優しさに騙されちゃうんだろっ」

「女はそういう生き物なのかもしれませんよ」

「ていうか、このみちゃん、それ中学生のセリフじゃないよ!」

「バーカ、優希が童貞まるだし過ぎるんだよ!」

「童貞!」

「童貞!」

「そうなんですよおー。お姉さん、良かったら僕に教えてください!」
ちよつと待て、と草平は思った。一体何をどう解釈すればいいのだろうか。

黙ったまま立ち尽くす草平に気付き、皆が声をかける。

「おお、お帰り、草平」

「草平さん、お疲れさまでーす」

「おじゃましてます」

「はじめましてーっ」

そして、最後に口を開いたのが、姉の美咲であつた。

「久しぶり。バイト頑張ってるらしいね」

何がなんだ。ともあれ、この状況を頭の中で整理しなければならない。

まず、姉の美咲がいつの間にか帰ってきている。これが一番の重大事項だ。その上、見知らぬ女の子が二人もいる。いや、よく見れば女の子の内の一人、優希の隣で生意気そうな口をきいているのは、どこかで見たことがあると思つたら、隣の家に住む女子中学生である。いつからか美咲に懐いていたので、美咲が帰ってきたのを見て遊びに来たのかもしれない。もう一人の女の子はOL風なので、姉の友達だろう。いや、そんなことはどうでも良いのだ。それより姉である。

一生帰つてこないとは思つていなかったけれど、割としっかりした姉のことだし、何の連絡もなく突然こうして帰ってくることは、弟としては想定していなかった。心の準備ができていないし、それよりも、姉に対して瀬名と優希のことを何も説明していないのは、どう考えてもまずい。どう考えてもまずいはずなのだが、目の前で当の姉が瀬名や優希と楽しそうに談笑しているのを目撃した草平が、今さらどう説明できるだろうか。

「まあ、座れよ」

すっかり家主のような風格の瀬名に言われ、とにかく草平は言われたとおり座るしかなかった。

「あの」

草平は、実の弟であるというのに、いまやこの中で最も美咲に対してよそよそしく話し掛けていると言っても良かった。

「とりあえず聞きますけど、いつ帰ってきたの？」

恐るおそる聞くと、美咲はしれつとして「夕方くらいかな」などと言う。

美咲は近眼でいつもコンタクトレンズをつけているが、今は、家で寛ぐ時専用の紫の縁の眼鏡をかけている。初対面の弟の友達と、いきなり寛いで話など出来る性格ではないと思っていたが、実際、打ち解けてしまっているように見える。別段怒っている様子でもない。

瀬名と優希がここにいる事情を、どこまで把握しているのだろう。かなり疑問だが、それにしても何も言わずに機嫌良さそうにしている姉にわざわざそんなことを聞くのも、ずいぶんとばかばかしい気がする。

「まあとりあえず飲もうよ」

草平にグラスを差し出したのは、姉の友達（草平はあとで、彼女の名前が未樹だということを知る）だった。とりあえず飲むしかない。考えなければならぬことは明日にでも考えよう。

草平はよく解らないまま、結局つぶれるほど飲まされてしまった。その夜は、隣の女子中学生が自分の家に帰ったあと、その他全員で雑魚寝だった。

「ちょっと、草平！ そんなところでいつまで寝てるのよ。起きてよ！」

草平は、久しぶりに姉に叩き起こされた。相変わらず朝の姉は機嫌が悪い、などと思いながら起き上がってみると、叩き起こされるのも当然のことで、草平はトイレの便座に腰掛けたまま寝ていたのだった。

「うめん」

謝って、草平は自分の部屋に帰ろうとした。が、もともと広くない自分の部屋に瀬名と優希が寝ていて、とても割り込めそうな空間がない。

仕方なく、リビングでクッションを枕にして横になっていると、また美咲が来て言う。

「部屋割りだけど、私は私の部屋を使わせてもらうことにしたからね。あんたはあの子たちと一緒に、うまく部屋を使ってやってよね」

「俺の部屋のほうが狭いのに」

口をついて不平が出たしまったが、次の瞬間には草平は自分の失敗を悟った。草平は、そんなことを言えた立場ではなかったのだ。

「狭いも何も、あんたが連れ込んだ友達でしょう。だいたい、私とあの子たちが一緒に寝ても問題がないのも思ってるの？」

「いや、すみません。解った、なんとかするよ」

とにかく謝ってから、姉に改めて聞く。

「彼らについて、全然説明してなかったけど、どこまで事情を聞いてるの？」

「事情のほうは、あの子たちから直接聞いて、わかってる。確かに可哀相よね。うちにしばらく居候することは仕方がないと思ってるから、大丈夫。まあ、だからと言って、私のスペースを貸してあげるわけには行かないけど

ね」

彼らが可哀相？

どうやら瀬名と優希は、何かもつともらしい嘘をついて、ごまかして姉を納得させたらしい。一体どんな嘘をついたのかは解らないが、草平はその話に触れるべきではないということは確かだった。

「彼らが起きてきたら、部屋割りについては話し合ってみるよ」

姉は納得した顔で、仕事に出かけていった。昨日あんなに飲んでいたというのに、まったく社会人というのはすごいものだ、などと見当違いなところで感心したりしながら、草平はその後姿を横目で見送った。

第十章

会わないよ、きつと会わない。大丈夫。

料金を払ってチケットを受け取ると、奈々は途端に激しい後悔に襲われた。「会っはぶがない」と思いながら、何をしに自分はこんなところまで来ているのだろう。

一人でクラブに来るのも初めてだ。瀬名は、この店のスタッフに昔からの知人がいることから、時々ここでDJをやっている。そのことは知っていた。

手にした千五百円分のドリンクチケットから、とりあえず一杯のビールを入手し、なるべく隅に近いテーブルにもたれかかって、奈々は周りの様子を見た。

思ったよりも店内は暗い。これなら万が一遭遇しても、まさか奈々が来ているとは知らない瀬名には、気付かれな
いだろう。暗闇と大音量に包まれているのは、思いのほか気持ちの良いことだと気付かされる。

どうして、こういう気持ちよさや、楽しさを、共有しようと思えなかったのだろう。瀬名は、見においでよ、と何
度も誘ってくれていたのに。

結局奈々は、今日初めてこの店を訪れることになってしまった。しかも皮肉なことに、一人で。

割と早朝から出かけなければならぬ仕事に就いているから、というもつともらしい理由をつけて、夜遊びはずつ
と断ってきたのだが、本当はそんな理由じゃないことは奈々自身が一番知っている。

「あたし、ばかみたいだなあ」

大音量の中で小さく呟いてみても、誰にもその声は届かない。

と、突然右肩に覚えの無い重さを感じて、奈々は慌てて振り向いた。

手の主は、瀬名ではなかった。

奈々は、やはり安心と絶望の入り混じった気持ちでその人の顔を見る。大柄で髪が短いので、暗い中では一瞬解ら
なかったが、女の人だったので安心した。奈々は、こういうところで女の人に声をかけられやすい性質なのかもしれ
ない。

「……」

彼女は何か言ったが、流れる音楽のヴォリュームに負けて、その声は奈々の耳には届かなかった。奈々は大仰に首
を傾けて見せて、それから耳に手をあてがった。聞こえなかったということが伝わったと見え、彼女は奈々の耳に口
を近づけて、半ば叫ぶように言った。

「ひびいて」

奈々は声で答える代わりに大きく三回頷いた。

「さみしそうな、かお、してたから。いっしょに、おどろつよ」

奈々は少し困った顔で、笑顔を返した。彼女はおまかいなしで話を続ける。

「あたし、じゅり。で、こいつ、ひろ」

ふと見ると、じゅりと名乗る大柄な女の脇には、茶髪の男の子がにこにこして立っている。といっても、この暗い中サングラスなどをかけていて、顔はよく解らない。

一人で行動しないと目立ってしまうかもしれない。奈々は危惧した。自分には、まだ彼と会う自信がないことを、改めて思い知らされる。しかし、彼らを撥ね付けるような勇気もなかった。奈々も、じゅりの耳に口を近づけ、叫ぶように言った。

「あたし、なな。おどるのもいいけど、もうちょっと飲んでいたいな。おはなし、しない？」

じゅりが、人懐こい笑顔でうんうんと頷いたのを確認して、奈々は二人をさらに奥にあるバーコーナーまで連れて行った。ここまで来れば、大音量で流れる音楽も多少は抑え目に聞こえてきて、普通の声でも何とか会話が成り立つことが解った。

改めて乾杯のあと、しばらく話が弾んだ。二人が、このクラブによく出入りしているうちに仲良くなった友達同士だと解った辺りから、奈々はまたウズウズしだした。

瀬名の姿はまだ見つからない。けれど、ここにはかなり来ているはずだから、きっと二人も彼のことを知っているだろう。様子だけでもいいから、聞きたい。

「ねえ、瀬名くんって人、知ってる？」

奈々が聞くと、じゅりが答えた。

「あ、多分その人知ってる。でも、最近はわからないな。ひろ、知ってる？」

「うーん、わかんない」

「……そっか」

はやり、奈々はどこか安心した。いまだ、彼の現状を知る勇気が足りていない自分を確認する。彼がいそんなところに足を運んでも会わないことや、彼に関する現状がわからないことは、もう追いかけるべきではないという暗示かもしれない、とすら思う。

けれど、それでいいのだろうか。

はずみとはいえ、「出てってほしい」と強く言ってしまったのは、ほかでもない奈々のほうだった。本当は、そんなことを言いたかったのではないのに、奈々はいつも言葉が少なすぎる。いろいろ考えすぎて、言葉がついてこないのだ。

フォローのないシンプルな言葉だからこそ、彼は必要以上に傷ついているはずだった。あそこまで言われて、彼のほうから帰ってくるはずもないのは、奈々も知っている。

はずみとはいえ、「出てって」と強く言ってしまったのは、ほかでもない奈々のほうだった。あそこまで言われて出て行ったからには、瀬名が自分から帰ってくることはないように思う。

奈々が、本当の気持ちをきちんと伝えない限り。

「ねえねえ、ちょっと待って」

「はい？ …… あ、こんにちは」

四限の授業を終えて帰ろうとしていた草平に突然声をかけてきたのは、神田という男だった。草平が彼とはじめて会話をしたのは数ヶ月前のことだったが、その時、既に彼のことは知っていた。噂話に疎い草平ですら、知っているのだから、密かに有名な男ということになるかもしれない。

神田は三浪してこの大学へ入り、入学してからもう五年になるはずだが、未だに草平たちと同じ、つまり二年次の単位を取るために授業を受けている。若く見えるが、計算すると、もう二十六歳くらいのはずだ。

「今の授業のさ、今までのノートあつたらちょっと見せて欲しいんだけど」

数ヶ月前にその声をかけられたのがきっかけで、何となく顔を見知るようになった。授業以外に何か接点があるわけではなく、そもそも神田は殆ど授業に出ていないのだが、たまに校内で出くわすと、ちょっとノートを見せて、ちょっと会話をして、そのまま別れてまたしばらく会わない、という関係が続けている。

そんな勝手な関係でありながらも、草平は彼に対して特に嫌悪感を持つこともなかった。神田のほうも、普段は初対面の相手に突然声をかけるようなことが出来ない性格だというのに、不思議なものだ。お互い、何となく似た雰囲気を感じたのかもしれない。

とはいえ、今日は流石に驚いた。突然声をかけられたから、またノートを見せてくれと言われるのだとばかり思っていたのに、

「実は、僕、退学することにした」

などと、報告されるとは予測もしていなかった。草平は驚いて何も言えなかった。というか、むしろ何の言いよう

もなかった。草平は神田とは別に友達というわけではないし、何も報告されずに退学していたら、いなくなったことにも気付かないくらいの関係でしかなかったはずだ。

そう思いながら、草平が言葉を探しあぐねていると、今度は突然、死角から小柄な女の子が草平と神田との間に割って入ったので、ますます訳が解らなくなった。

「ちょっと、待ってよ！」

小柄だったので『女の子』だと思ってしまったが、彼女もまた学内ではちょっと知れた存在で、草平よりも幾らか年上のはずだ。彼女は去年の春、草平たちと同じ学年に入学した。小柄で、元気は良いけれど、明らかに十九、二十歳くらいの女の子とは違っていた。噂によると、彼女は一度他の大学を卒業したが、二年間のOL生活を経て、それからまた受験に挑戦してこの大学に入学したのだという。今どきの日本ではちょっと変わっていると思う。

二人がどんな関係なのか、草平は知る由もない。が、噂の通りだとすると、白橋女史も二十六歳くらいだと思われるし、年齢が近いことや何かしら同種のリスクを背負っているという感じがあるのだろう。確かに、よく二人が言葉交わしているのを見かけたことがあったかもしれない。

「本気で辞める気？」

「だって、五年も通ってるのに、まだ二年の単位が取れてないんだよ？　あと四年で最後まで単位が取れると思う？」

「そんな問題じゃないでしょう。普通の人は四年で四年分の単位を取るんだから」

「普通の人くらい頑張っただけ、もうとくに卒業してるよ。それが出来ないんだから、大学にいつまでもいたって仕方ない」

草平は、突然自分の目の前で繰り広げられた激しいやりとりを、制止するわけでもなく、同調するわけでもなく、

ぼんやりと聞いていた。内心は立ち往生しているが、よくよく考えれば自分にはあまり関係の無い話だ。かといって、立ち去ることも出来ない。なんとなく。

白橋女史は、神田の退学を止めようと必死に語りかける。苦勞してやっと大学に入ってきたのは何のためだったのか。何かやりたいことがあったんじゃないのか。退学した後のことは考えているのか。彼女の情熱には、話に関係のない草平のほうむしる心打たれるくらいだった。

「でもや」

しかし、神田は覇気の無い声で言った。

「大学行っても面白いことがあるわけじゃないって解っただけで満足だよ。僕はあなたと違って学問を極めたいとも思っていない。信頼できそうにない教授の、面白くも無い授業を受けて、闇雲に単位を取ったって仕方ないんじゃないかな」

「元々、大学は勉強だけをする場所だと思っていたわけでもないんでしょ？」

「うーん、サークルも三回くらい顔出したまま行かなくなっちゃったし。まあ、学校自体ほとんど来なかったから仕方ないけれど、友達ってほどの人もいないし、ましてや恋愛なんてとてもできそうにない」
そこまで黙って聞いていた草平だったが、突然、口を挟みたくなって、言った。

「ちょっと待って。神田さんはどうして、退学するなんてことをわざわざ僕に言ったんですか？」

神田は少し自嘲するような控えめな笑顔を浮かべながら、正直に答えた。

「このまま辞めたら、僕がいなくなることになって、誰も気付かないんじゃないかな、と思ったんだ。一人くらい、僕がここにいたことを知っている人がいても、いいんじゃないかって思った」

「正直言って、神田さんが学校を辞めようがどうしようが、僕にはまったく関係のないことです。けれど、こ

んなふうには巻き込まれたからには、知らん顔をするわけにも行かなくなってしまいました」

神田も白橋も、呆気に取りられて草平を見ている。彼がこんなに喋るとは予想もしていなかった、とても言うような顔だ。草平は、気にせず続ける。

「まあ、退学するしないは別として、とりあえず友達になりませんか？」

「は？」

「今日、うちに遊びに来てください。僕、バイト休みなんです」

「……」

草平は何となく、最近自分が変わっていくことに気付き始めていた。今までだったら絶対に言えなかったような言葉も言えるし、しなかったようなことが出来る。そんな気がしている。

半ば絶句している感じの神田の背中を、草平が無理やり押す。

「白橋さんも一緒にどうですか？」

「はい。じゃあ」

神田はわけもわからず草平の後を追う。白橋は、さらに訳が解っていないくて、とにかく運を天に任せるような気持ちだった。草平だけは、そんな中で一人、異様なまでに愉快だと感じているようで、足取りも軽く帰路についていた。

第十二章

寝る部屋は無くなり、毎晩リビングに瀬名と雑魚寝をすることになってしまった優希だが、それはそれで今の生活が気に入っている。なぜなら、突然帰ってきた草平の姉が、予想外に優希好みの美人だったからだ。今日も嬉々として草平の家に帰ってみると、なにやら先客がいるようだった。

「あ、おじゃましてます」

伸ばしっぱなしといった風情の長髪の男が優希に挨拶し、その隣にちょこんと座っている女の人が優希ににっこり笑いかけた。

「噂の優希くん？」

雰囲気から察するに、この人も隣の男も草平と同じ大学の学生のようにだ。草平より少し年上に見えるので、先輩かもしれない。美咲とはまた違った感じだが、小柄でキュートな感じで、可愛い。草平さんナイス。

「ねえねえ、ここに座って」

お姉さまが、隣に座るよう誘導する。嬉しさとも戸惑いとも言える想いを抱えながら、優希は素直に従う。一体これから、どんなに素敵なことが始まるんだろう……。

という期待は、見事に一瞬で碎けた。

「大学に行くことについてどう思う？ 現役高校生の声を聞きたいの」

いきなり質問を投げかけられた。しかも、どちらかというと、今は真面目に考えるのなるべく避けて通りたいところに直球である。これは困った。

「それはまた突然、難しい質問ですね」

とりあえず涼しげな顔で言いながら、優希は草平に助けを求めるべく目配せをした。草平は優希の気持ちを察したのか、「まずは紹介するよ」と言って二人について教えてくれた。

長髪男が神田さん、小柄なお姉さまが白橋さん。二人とも草平とは大学で一緒だが、それぞれに事情があつて年齢はかなり上である。そういった事情で苦労してわざわざ大学に入ったというのに神田さんが退学すると言い出して、今ここで話し合っているらしい。

一通り状況は飲み込んだものの、優希にとってこの状況は理解できない。

「で、話し合つて言つたつて……話し合つて一体どうするっていうんですか？」

優希にとってそれは素朴な疑問だったが、白橋は少しむきになって反論した。

「普通に努力すれば簡単にできることを放棄して逃げ出すなんて、情けないし卑怯だと、私は思ふの。だから

……」

「卑怯だとしても、あなたに害は無いよ」

神田は、おそらく自分ではそこまで意識していないのだろうが、ひどく冷たい口調になることで、白橋の言葉を遮った。それに対し、白橋が傷ついたような顔をしているのを、優希は見逃さなかった。

（なんだ、白橋さんは神田さんのことが好きなのか……。）

高校生の優希がすぐに気がついたというのに、草平は呑気に口を挟む。

「そつだよな。大学には、行くのも辞めるのも自由なんだし。辞めるなって他人が言うのは筋違いだとは思う」
「でも……」

白橋がまた何か言い返そうとするのと同時に、玄関のドアが開き、何人かの足音が聞こえてきた。

「おじゃましてす」

「へー、ここが草平くんの家かあ」

能天気な声でシリアスな雰囲気を良くも悪くもぶち壊してくれたのは、瀬名に連れられてきた二人の女性だった。
「あれ、あやこさん、あんじさん。瀬名さんも、今日は早番だったっけ？」

草平がそう言うので、彼女らが草平と瀬名のバイト先の人だということが優希にも解った。何度か話にも聞いたことがある。すかさず優希は二人についてのデータを頭の中でまとめた。

あんじさんは自然体な感じが好ましく、頼りになりそうなお姉さま。あやこさんはとても清楚な感じの素敵なお姉さま……。と。二人とも素敵だ。この家で生活を始めてからというものの、優希は出会いだけで満足してしまいそうなほど素敵な人と出会っているような気がする。

「今日はこんなに集まって、今から何か始まるのか？」

瀬名に対し、草平が大して面白くもなさそうな顔で答えた。

「いわゆる人生相談ってやつですよ」

「ふーん。まあ事情はわかったけどさ。大学に行きたくないんなら、仕方ないんじゃないの？ お金もかかることだし」

「そつだよ。私だって大学なんか出てないけど何とか生きてるしさ。行かなきゃダメってことは無いでしょう」

「でも、彼は遅く入学した分、親に迷惑や心配も沢山かけてるわけよ」

「そつだよな、金も相当かかってるんだろうしなあ……」

「留年し続けたあげく卒業できなかった、という展開になるよりは、今辞めたほうがいいって気もするけど」

「ええ、僕も大学に未練があるわけではないし、これ以上迷惑をかけるよりは……」

この調子で小一時間。皆は神妙な顔をし、内容は堂々巡りをし、もはやここまで来ると、相談というよりは、ただの雑談だと思つたほうが正しいかもしれない。

（良い大人が揃いも揃つて、つまらないことしてるよな。退屈だ。外へでも遊びに行こうかな。）
そつ思つて、一人でこつそり優希が立ち上がろうとした、ちょうどその瞬間、

「あー、なんか飽きた」

あんじがつぶやいた。率直な物言いだ、悪意がこもっていないので、とても気持ちいい。周囲の皆も、出口の無い話に飽きかけていたのか、ほつとした表情を垣間見せる。

「もつとさあ、こつ、明るい話をしようよ」

「明るい話つてたといえば？」

「やっぱコイバナ？」

恋の話か。優希もこれには大賛成だった。そもそも、大学のことなど、今はまだ考えたくない。それで、話が大学のことに戻る前に、率先して優希は話を振つてみた。

「そつだ、コイバナで行きましょう。草平さんには、そついう話は無いの？」

言つ前から、答えは知れていた。一緒に暮らしていて、草平に女つ気がないのは解っている。ただ、どんな反応をするのか見てみたかったのだ。

草平は首を傾げて、ただ小さく言った。

「さあ、どうだろう」

この反応は、優希にとっては意外だった。草平は晩熟っぽいところがあると思っていたので、この手の話で恥ずかしがらせて、からかったりしたかったのに、予想外の落ち着きで切り返されてしまった。なんというか、余裕の表情である。

（大学生にもなると、こんなものなんだろうか？）

驚いている優希の横から、すかさずあやこが口を挟んできた。

「あー、草平くんしらばつくれちゃってー。最近、ネコちゃんと仲が良いらしいって、みんな噂してるよー」
「えっ！」

自分で話を振ったくせに、優希が一番驚いているのは、滑稽だった。

「いや、それは違いますよ」

「違っってことは、他に彼女いるんだ？」

「彼女なんていませんけど」

すると、先ほどまで大学が云々としかめつつらで語っていた白橋までが、話題に乗ってくる。

「ひょっとしてうちの大学に？」

「いや、俺にはそういう話はありませんから。それより、あやこさんだって、ねむさんとの関係はどうなんですか」

「な、何よ、どっつて……」

「あやこはねえ、いまだに好きって気持ちを伝えることもできずにいるんだよー」

「ちょっと、そんなことまで言わないでよ」

口をつぐんだあやこの代わりに、あんじが口を挟むことで、草平の形勢が逆転した。話に出てくる人物名は解らないものの、先ほどと違ってずいぶん会話に活気があるのが、優希にもよく解る。なるほど、確かに『恋の話は明るい話』というわけか。

「そうか。初めから、明るい話をすれば良かったんだ」

「何だよ、突然？」

「いや、白橋さん。神田さんのことが好きなんですよ。好きだから、大学に残って欲しいんですよ？」

しかし、優希の期待通りには話は展開しなかった。白橋が、それを聞いたとたん、うつむいて黙りこくってしまったからだった。

あつという間に、その場は重苦しい沈黙に包まれる。

優希は、自分がまずいことを言ってしまったことには気がついたが、どうしてそれがまずいのかまで判断する力がなかった。恋の話は明るい話題のはずなのに、なぜこんなに盛り下がるのか、理解ができない。

焦るばかりで言うべき言葉を見つけれない優希の代わりに口を開いたのは、神田のほうだった。

「知ってるよ」

「え？」

「白橋さんから直接言われたから、知ってる。けれど、僕が断ったんだ」

「どうして？」 神田さんに、他に彼女がいるからですか？

「いないよ、そんなの。ただ、彼女は立派過ぎて僕にはつりあわないと思った。確かに、何年も遅れて大学に

入ったという意味では同志だけど、僕と彼女は決定的に違う。僕はそれまで何もせずフラフラしていて、親に『何もしてないんならせめて大学くらい行ってちょうだい』って怒られて仕方なく入っただけなんだ。それに引き換え、彼女は一度社会に出て、勉強しなおしたいことがあると思って大学に入っている。こんなんじゃ、僕が尻込みするもの仕方ないと思わない?」

周りの人間が誰も口を挟めずにいると、やがて瀬名が言った。

「そういうのって、関係ないんじゃないかな。たぶんさ、白橋さんは同じ境遇で大学に入った仲間だからあなたのことが好きになったってわけじゃないんだよ。あんたが一人でどうでもいいこと気にしてるだけなんじゃないの?」

白橋は相変わらずうつむいて、誰の眼も見ないままだったが、小さくうなずいた。

「ちゃんと思ってること言わなきゃ、伝わらないよ」

あやこも、白橋に声をかけた。横からあんじが「あやこもね」と茶々を入れると、白橋はとうとう嘖き出して、笑いながら「ありがとう」と言った。

一気に場の雰囲気が明るくなった。

「良かったあ。やっぱりコイバナは明るいつスね!」

良い空気が訪れたので、優希はまた口元が緩んで、思わず言ってしまったが、周りは皆、苦笑した。優希が一人、その中できょんとしているのと、苦笑を代表して、瀬名が優希を小突きながら説明してくれた。

「バーカ。そもそも、お前みたいな子供が、他人のことに首突っ込んだようなこと言うから、話が複雑になったんだろ。お前はもっと経験値上げろよ」

「やだなあ。だから、瀬名さんに弟子入りしてるんだよ。だから、もっと女の子紹介してくれないと……」

「そっだっ！」

優希の言葉を、突然大きな声で遮ったのは、あやこだった。

「今日はそこそこを聞こうと思って乗り込んだんだった。ね」

「うん」

あやこは、あんじの同意を求めると、改めて瀬名に向き直り、質問をした。

「瀬名くん、最近そこらへんどうなのよ？」

「そうそう。以前、彼女と同棲してるって言ってたよね。なのに、なんで今は草平くんの家で暮らしてるの？」

「別れたの？」

「逃げてきたの？」

「いや……」

一挙にあやことあんじから問い詰められた瀬名が、何も答えられないのを見て、先ほど小突かれた仕返しの意味も込めて、優希はしたり顔で言っちゃった。

「フラれちゃったんですか？」

瀬名は、触れられたくない場所に触れられたような顔をして、「うるせーよ！」と言いながら、優希を再度小突いた。

本気で怒っているのか、先ほどより痛かった。

結局、瀬名さんもそうなんじゃん。と、優希は突然思った。これで、いろいろなことが一気に解ったような気になる。

白橋さんの想いに尻込みして大学も簡単に辞めようとしてる神田さんも。神田さんが大学を辞めるのを阻止するこ
とでしか、自分の気持ちを表現できない白橋さんも。自分の恋の話には全然触れない草平さんも。長いこと気持ちを
伝えることができないにいるあやこさんも。そういえば、自分には話の矛先が廻ってこないように、絶えず人に話を振
るあんじさんも。そして、自分が振られたという現実を見ることのできない瀬名さんも。

誰でも、何かから逃げているんだ。そして、逃げてはいけないということを本当は知っているから、悩んでいるみ
たいだ。

たぶん、自分も。

優希に解ったのは、その程度のことだった。

第十三章

「気分が悪い？」

突然、低い声が自分に放たれたのを感じて見上げると、いつのまにか一人の店員が奈々の前に立っていた。微笑んではないが、冷たい表情でもないようだ。

「いえ、大丈夫です」

奈々は控えめに答えたが、客が引いてちょうど手が空いているのか、彼は奈々の前から動こうとせず、カウンターに大きな手を静かに置いた。店内の照明が少し暗いせいもあるのだろうが、やや彫りの深いその顔は、奈々の目には日本人には見えなかった。混血かもしれない。胸のネームプレートには『Gido』と書いてある。ますます日本人かどうか判断しにくい。

今日は、親友のユカリと会う約束をしていた。

彼女のほうから、奈々の状況を気にして、気晴らしにパーツと遊びに行こう、と誘ってくれたのだ。奈々自身、そういう誘いを待ちかねていたのかもしれない。いつまでも塞ぎ込んでいるわけには行かないし、たまには何もかも忘れて遊ぶほうが精神衛生上良いに決まっているのだ。

とにかく楽しみにしていた今日の約束であったが、待ち合わせの七時半直前になって、ユカリからのメールが携帯

に届いた。

「ごめんなさい、一時間遅れます。

どうしても仕事が終わらないの！

着いたら電話入れるから、近くで時間でもつぶしててください。

ほんと、ごめんね……」

そんなわけで、奈々は仕方なく、待ち合わせ場所近くのコーヒーショップに入ったのだった。

その店員が話し掛けてきたのは、店に入ってから、ゆうに四十分は過ぎた頃だった。目の前のコーヒーカップはすっかり空になっていて、奈々はすでに手持ち無沙汰ではあった。しかし、ユカリが来る予定の時刻まで、あと少しなので、店を出る気にもなれない。どうするべきか、と考えていたところだったので、コーヒーショップの店員とすこしくらい会話してみるのには、時間つぶしとしては悪くないような気がした。

いつもだったら、知らない人とそんなふうには話することなど苦手なはずなのだが、奈々はこの店員には何もかも話しても良いような気がした。どんな人かはまったくわからないけれど、この店員はどこか人を安心させるところがあったのかもしれない。

あるいは、単に何の人間関係もなく、話を聞いてくれる行きずりの人が欲しかっただけかもしれないけれど。

「具合が悪いんじゃないかと、ずっと、元気ないんです」

奈々はゆっくりと話し始めた。

「一緒に暮らしていた恋人が、いなくなっちゃったんです」

「それは何故？」

「私がね、出てけって言うっちゃったんです。本当は全然そんなこと全然思ってたのに」

「それは何故？」

この店員は、やたらと理由を聞きたがる、と奈々は思った。別段、気に障る言い方というわけではない。深い意味があつてそう切り返しているというよりは、それが単に口癖なのかもしれないと思わせる程度の軽いものだ。だから、奈々は気が楽になった。

店員の質問が無責任ならば、自分の発言も無責任でいいのだ。所詮行きずりの話し相手なのだ。奈々は、無責任であるからこそ、真摯に答えたいような気分になった。

「……うつん、心のどこかではずっと『出てけ』って思っていたのかもしれない。今までに何度『別れよう』って思ったかも、解らないくらい」

「何故？」

「彼はね、たくさん楽しいことを知ってる人なんです。一緒に住んでるのに、何日も帰ってこなかったり、性別を問わず友達がいっぱいいたり。私、そんな状況がすごくいやだった。いつも苛立っていた」

「それは、何故？」

店員は先ほどから全く同じ言葉しか発していないというのに、奈々の心を開かせ、複雑に考えすぎた頭を、いとも簡単にほぐしていくようだ。不思議と、奈々はいつになく素直になっていた。

「嫉妬だっ たんだろ うなあ。私は、本当に彼のことが好きで好きで仕方なかったの。私と一緒にいない間の彼が、誰と何をしているかが心配で、そのことばかり考えてた。それが、つらくてつらくてたまらなかったの。私なん

かいなくても楽しそうに過ごしてる彼の姿が妄想になって、それで一人で傷ついて、拳句、こんなにつらい思いをしなきゃいけないなら、もう別れようって思ったの。実際には何にも傷つくことなんて起きてなかったのに、『これ以上傷つきたくない』なんて思っちゃって……」

店員は、もう何も訊かなかった。奈々が自分の中に答えを見つけたら、あとは他人の手など必要が無いということを知っているのだ。

「それで結局、私のほうが彼を傷つけちゃったんだ」

奈々は、初めて自分の状況を冷静に把握できた気がした。

「彼は私のこと傷つけてなんかなかったのに、私の被害妄想が彼を悪者にしたてあげて、だから私は彼を、」
もう一度、息を呑む。店員がどこまで自分の話を聞いているのか解らなかった。聞いていなくても別に良かった。

「私が彼を追い出しちゃったんだ」

今、ようやく奈々は全てを認めた。

私は、いつも言葉が少なすぎる。

いろいろ考えすぎて、言葉がついてこないだけなのに、結局、少ない言葉が人の気持ちを突き刺してしまう。

私は傷ついていなかった。

傷ついたような気がしていただけだった。

そして、彼は本当に傷ついた。

あそこまで言われて、彼が自分のほうから帰ってくるはずがない。
私は何をやっているのだろう。

帰ってきて欲しいと思いつながら彼を探しに行ったくせに、遭遇しないことをどこかで喜んでいる。今度こそ自分の
ほうが傷つきそうで怖いからだ。

こんな状況になってもまだ、自分だけ傷つかずに済もうとするなんて。

奈々は、最後の一言を言おうと、まっすぐに店員に目を向けた。しかし、ちょうどそこへ新しい客が入ってきて、
店員はそちらの対応に行ってしまった。

（言わなきゃ）

と、奈々は立ち上がって初めて、鞆の中で自分の携帯電話の着信ランプが光っていることに気がついた。マナーモ
ードに切り替えて、音が出ないようにしていたのだ。液晶画面にユカリの名前が表示されている。奈々は、慌てて電
話に出た。

「もしもし」

「私、ユカリ。ごめんね、遅くなって。今、駅から待ち合わせ場所に向かってるところ。どこに行けばいい？」

「待ち合わせ場所の前に、コーヒースhopがあるでしょう」

「そこに行けばいい？」

「ううん、今はそこに居るのだけど、もう帰らなきゃいけないの」

「うん？」

「ごめん、私、急用思い出しちゃったの。すぐに行かなきゃ」

「え？」

確かに自分の都合で待ち合わせ時間を遅らせてしまったのは申し訳なかったものの、なかなか片付かない厄介な仕事を無理やり片付けて、急いで来たのだ。ユカリは、この突然の展開に腹を立てても良い立場かもしれない。けれど、彼女はそうしなかった。

ただ、一言だけ言って、電話を切る。

「がんばりなよ」

自分との約束をこれほど急にキャンセルしてまで奈々がしなければいけないことが何か、ユカリにはよく解っていた。

電話を切った後、ユカリはもう一度、小さい声で「がんばれ」とつぶやいた。

第十四章

しかし、瀬名さんがあんなに素直に傷ついた表情を見せるとは意外だった、と草平は思った。能天気で、友達も多く、いつも楽しそうにしているだけに、彼が自分のところに転がり込んできた理由が、たかが女の子に振られたことだったなんて、想像もしていなかったのだった。

それに、瀬名さんだけでなく、みんな意外と悩みながら生きているものなのだな、と草平は思う。特に恋愛のことに關して、どうしてそこまで必死になるものなのか、草平にはいまいち解らなかった。自分は、そんなに夢中になるような事や人に、今まで出会ったのかどうかすら、解らないのだ。

「で？ 結局、神田さんはガッコウ辞めちゃったの？」

伊勢の隣で草平の話を聞いていたヨウヘイが、興味を示してきた。ヨウヘイも草平たちと同じ学科で、同じ授業をとっている水曜日と木曜日には、一緒に学食で世間話をしながら昼飯を食べる仲だ。もともと一緒に過ごす人間が限られている草平と違い、彼はなんとなく人懐こい感じがあって、学部の広範に亘り友人がいる。当然のことながら、彼には学内のいろいろな噂を耳にする機会が多く、そういう草平が神田や白橋が何者かを知ったのも、ヨウヘイ經由の情報であった。

「いや、まだ辞めてない。前期が終わったら辞めるって言ってたけど、気が変わることもあるだろうな」

「へーえ。それで、神田さんと白橋さんって付き合うことになったの？」

「知らない」

草平は、誰と誰が付き合う、というような話には本当に興味が無かった。ヨウヘイはそれに対し、ニヤッと笑って言った。

「草平くんのそういうクールなところ、好きだよ」

ヨウヘイは本心で言ってくれているのかもしれないが、そういう言われ方をすると、逆に一歩引いたところから冷静に観察されているような気がして、草平のほうはなんとなく素直に喜べない。しかし、それも含めてヨウヘイの性格なのだろう。彼はまったく気にせず話を続けようとした。

「ところで、白橋さんはぞ……」

そこまで言いかけて、ヨウヘイは突然、不自然なくらい姿勢を正した。

「どうしたんだよ」

伊勢が驚いて尋ねる。草平は、ヨウヘイの視線の先に一人の女の子がいることに気付いた。

「橘さんか」

「うん。カワイイよね、彼女……」

恋というよりは、どちらかというと憧れのアイドルを目の前にしたようなヨウヘイの表情に、草平と伊勢は思わず笑った。

「確かに、ちょっと目立つけどな。誰？　うちの学科の子？」

伊勢は彼女を見るのが初めてだったらしかった。ヨウヘイが彼女を眼で追いながら、答える。

「うん、一年生だけだね」

「へえ」

伊勢はそう言つて、再び彼女を見、それからふと氣付いたように言った。

「草平はなんであの子のこと知ってるんだ？ 人の噂なんかには、あまり興味が無い奴だと思つてたのに」
ヨウヘイも驚いて言つ。

「そつだよ。まさか、草平くんも彼女狙つてるの？」

草平は、一瞬ドキッとしたが、なんでもない顔を装つて答えた。

「別に。目立つから知つてただけだよ」

それは、半分は本当だつた。もう半分は、嘘とも言いきれないが、本当とは言えないグレーゾーンだ。

それに、ヨウヘイには残念な話だが、彼女を想つたところでそれは叶わない恋になることを、草平は知っている。本当に偶然に、草平は学校以外での彼女のことを知るきっかけがあつたのだ。

何週間か前の話だ。

その日のバイトは、瀬名と一緒に夜のシフトに入っていた。とはいえ、瀬名はホールでの接客についていたし、草平は相変わらず皿洗いを中心に、厨房の中の仕事を少しずつ手伝わされていた。

その夜は客が少なかった。暇だから話し相手になれよと言って、瀬名がホールから草平のことを呼んだので、草平はホール（といつても、すぐに厨房に戻ることでできる場所に限られていたが）に出て、掃除する振りをしながら、瀬名とくだらない話に興じていたのだった。

ある瞬間、草平は見たことのある女の子が客として来ているのに氣付いた。もつとも、その時点では名前を知らなかったが、あれは確か、うちの大学に今年入ってきた一年生だ、と思ひ当たつた。

草平の視線の先に気付いたのか、瀬名がそのテーブルの客について、小声で話し始めた。

「なんかあのカップル、さっきから全然会話が無いし、すげえ暗いんだよね」

確かにその二人は、たまに自分の目の前のグラスから飲み物を舐めるように飲むくらいで、ほとんど会話もせず、ただ向かい合って座っているというような状況に見えた。

「二人とも見た目はいいのに、あれじゃちよつとなあ……」

瀬名は、肩をすくめて言う。確かに美男美女だ、と草平は思った。

瀬名の話は、暗い二人には興味が無いといった具合に、他の方向へ展開した。草平はそれを聞き、時々は相槌を打ちながらも、なんとなく二人から目を離せずにいた。

よくよく観察していると、女性のほうは瞬きすら惜しむかのように男性を見つめている（半ば睨んでいるようにすら見える）のに対し、男性のほうはずっと彼女と目が合わないように伏し目がちになっているようだ。喧嘩中の恋人同士なのか、別れ話をしているのか、いろいろ考えてみたが、それにしても二人はあまりにも平行線を描いているように見えた。決して交わらない時間。彼女は何かを交差させようと、目を使って必死に訴え、彼は目を合わせないことでそれを拒絶する。どう考えても一方通行だった。

どのくらいの時間、そうしていたのか解らない。

彼女は、グラスに残った最後の液体を飲み干し、それからようやく意を決したように口を開いた。

「羽塚くん」

彼は、それでも彼女と目を合わせようとしない。彼女は構わず続けることにしたようだ。

「誘えば出てきてくれるのに、どうしてそっとなっちゃうの？ 私だって、羽塚くんがはっきりと断ってくれたら、私を嫌いだってはっきりに言ってくれたら、もっとずっと楽になれるのに」

彼は、相変わらず目を逸らせたままではあったが、小さく口を開いて、何か答えた。が、それは声も口の動きもあまりに小さかったので、何と言っているのかまでは、草平には判らなかった。

「そんなんじゃ、答えになってない。私は、そういう部分も含めて、羽塚くんを救ってあげたい」

強い口調だった。それから彼女は、ゆっくりと立ち上がり、自分の鞆と伝票を手に持ち、毅然とした態度で言った。

「私はあきらめないから」

彼女が伝票を持ってレジに向かってきたので、草平は慌ててレジに入った。瀬名はいつのまにかホールのほうで他の客の注文をとっており、レジの近くにいるスタッフが草平だけだったのだ。

彼女は伝票と一緒に、インターネットから印刷して使えるクーポンを提示した。そのクーポンに書いてあったので、草平は彼女の名前を知ったのであるが、その時点ではそこまで気が回らなかった。ただ、会計を済ませながら、彼女は彼と一緒に食事をするのを楽しみに、インターネットでわざわざマルディグラを検索し、こうして印刷してきたのだと思うと、草平は何とも言えない気持ちになった。

むしろ、彼女のほうを救ってあげたい。

草平は一瞬そんなことを考えたが、それは自分にはとても出すぎた真似だと感じた。

彼女が店を出て行ってから、ゆっくりと帰り支度をして帰っていった羽塚という男に対し、「ありがとうごさいます」と声をかけないことだけが、草平にできるせめてもの抗議なのだった。

第十五章

「今日は優希さんと二人か。どうしよう、ご飯、一緒に外で食べる？」

「い、いや。腹減ってたんで、もう弁当買ってきて食っちゃいました」

「そう？　じゃあ私、軽く食べながらちょっと飲むけど、付き合おう？」

草平と瀬名のバイトが、ともに遅番という日は週に一回か二回はある。そういう時、美咲はなるべく外で未樹などと夕食を食べてくるようにしているが、今日はたまたま一緒に食事をする相手が見つからずに、真っ直ぐ家に帰ってきたのだった。

まあ、優希さんと二人っていうのも、たまには良いかな。と美咲が思ったのも、事実である。

六歳も下なのだから相手は子供と言ったほうが良いかもしれないが、背格好はもう充分に大人に近づきつつある。そんな男の子と一緒に時間を過ごすことは、今の美咲にとっては安らぎのような、自分を思いのほかあつさりと捨ててしまったしように対するあてつけに似た気持ちのような、複雑ではあるけれど気分は悪くないイベントに思えたのだ。

しかし、優希のほうには、そこまでの余裕は無かった。

瀬名に遊びを教えてもらうつもりでこの家に来たというのに、最近は瀬名についていくよりも、この家で夜を過ご

すほうが多くなってきた。みんながいろいろな人を連れてくるので、わざわざ外に出なくてもここに出会いがあるというのも理由のひとつだが、それよりも、美咲と一緒になんとかして時間を過ごしたい、という気持ちが強かった。

美咲は、男三人のむさくるしい家に、突然やってきた女神のような人である。女神は、華奢な身体と長い髪の毛を持った、どことなくクールな美人だった。弟が一人いるだけの優希には、以前から姉というものに対しての憧れがあったが、美咲はまさに自分の理想のような姉だったのだ。

「はい、飲みます!」

答えながら、幸せだ、と優希は思った。

「高校生にお酒なんて勧めちゃいけないだけだね。どうせ、瀬名くんとかと遊んで、いつも飲んでるんですよ?」

美咲は、そう言いながら優希の分の缶ビールも食卓に用意する。アルコールに抵抗があるわけではないが、優希にとって、ビールというものは苦いだけで、本当は美味しいと思えない。しかし、美咲のすすめであれば、ビールを飲むくらい、わけのないことだ。

乾杯、と言って缶と缶をぶつけ合ったあとは、テレビを見ながら、笑ったり、出演しているタレントについて話したりして、時間を過ごした。優希は、本当に自分に素敵な姉ができたような錯覚にさえ陥る。

それにしても、美咲は意外と酒に強く、煽られたりしなければ自分のペースで長時間飲めるタイプのようだった。優希は、ビールを少し飲んだけなのに、もう酔っ払ってしまったというのに。

美咲は、優希が既に酔っているのに気付き、やっぱり彼はまだ子供なのだと再認識した。少しからかって、いろいろ

る聞き出してみよう、という気持ちになったのは、ごく自然な流れだったのかもしれない。

バラエティ番組が終わって、コマーシャルが流れ始めたとき、美咲は突然、優希に質問を投げかけた。

「優希くんは、学校で好きな子とか、いないの？」

優希は、突然の質問にうろたえた。脳裏には、ほんの一瞬、りさの顔が浮かんでしまったが、そんなものは過去の話だ。

「そんなん、いないですよ。学校の女の子なんて、みんな全然ガキで」

美咲は、ブツと吹きだして言った。

「自分だってガキのくせに」

「いや、まあ、そうなんですけど……」

笑って言いながら、優希はとつさに『そのこと』を思いついた。いつもだったら、思いついても言わないようなことだったかもしれないが、少し酔っているせいか、つい言ってしまったのだ。

「まだガキなんで、美咲さん、俺を男にしてくださいよー」

美咲はそれを聞いて、一瞬驚いて黙ってしまったものの、すぐに笑ってごまかした。

「私としようだなんて、十年早い！」

しかし、優希は真剣な口調で言い返した。

「でも、俺、美咲さんのこと好きです！」

「え？」

今度こそ、美咲はごまかすこともなく大いに驚いた顔をした。美咲だけではなく、優希自身も驚いていた。勢いで自分でも言つつもりの無かった言葉を発してしまっていることに。

沈黙の時間が流れる。

優希の下半身は、すでに「冗談だ」とは笑えない状態になってしまっている。美咲もそのことに気付いているかもしれない。

第十六章

閉店後のマルディグラの厨房で後片付けをしているところ、突然後ろから肩をたたかれたので、草平は驚いて振り向いた。

「あれ、ねむさん。どうしたんですか。深刻そうな顔をして」

「今からちょっと店長が来るから、ホールのみんなと一緒に、向こうで待ってて」

「店長？」

マルディグラの店長、といえば、草平は面接の日に一度会ったきりだった。以前は毎日店に出ていたようだが、近くに姉妹店のショットバーを開店したばかりで、向こうにかかりきりになっていたため、草平が働き始めたころからほとんど、こちらには顔を出さなくなっていたのだ。

「マサキさんが来るんですか？」

隣で聴いていた智も、それを聞いて驚いたような声を上げたが、草平はそれに対しても驚いていた。店長とはいえ若い男であることは憶えているが、バイトの皆から下の名前で呼ばれるような存在だとは思っていなかったのだ。

「珍しい。どうしてまた？」

「いや、ちよつと話があるって……」

草平は、ねむが気まずそうな顔をしたことに気がついてはいたが、特にそれを気にも止めなかった。

草平が智と一緒にホールに出てみると、今日の接客シフトに入っていた三人も、マサキに関する噂をしているところだった。

「マサキさん来るんだって。珍しいね」

「チヨちゃん、マサキさんの顔覚えてる？」

「うーん……なんか、うつすらとしか思い出せない」

「仕方ないよ」

キヤツキヤと言いつ合っている藤宮とチヨの能天気な会話に、あやこが珍しく強い口調で割り込む。

「マサキさん、ぜんぜん顔出さないで、ゼーんぶねむさんに任せっきりだもんね。彼にどんな苦労かけてるかなんて、きつと考えてもいないんだよ。ねむさんだってバイトなのに、ほとんど休みなく働かされちゃって……ひどいよね」

草平は彼女の主張を聞いて、以前会ったはずのマサキの顔を思い出そうとしたが、どうもイメージが一致なかった。顔は思い出せないものの、人に面倒を押し付けておいて自分だけが楽をするというような人には見えなかった、と思う。

そんなことを考えながら待っているうちに、当のマサキがやってきた。

「やあ、待たせちゃってすみません」

現れたマサキは、やはり草平の記憶していたイメージと大して変わらなかった。やや太目というのもあるが、控えめな笑顔を携えていて、あくまで柔らかい印象を持った男、という感じた。皆に悪口を言われるようなきついところは見られない。

しかし、次に彼の口から発せられた言葉のほうは、その外見とは裏腹にショッキングな言葉だった。

「実は、藤沢くんがこの店をやめることになったんだけど……」

「えっ！」

声をあげて驚いたのはあやこ一人だけで、周りは一瞬きよんとした。草平は、藤沢って一体誰のことだろう、と思いい、周りを見回した。そして、店長の隣で決まり悪そうな顔をしているねむを見て、そういえば彼の本名が藤沢だということに気付いた。

他の皆も、前後して気付いたのだろう。重苦しい雰囲気の中、店長は一人で話を続ける。

「僕も、この店のことはすっかり彼に任せっぱなしだったから、いなくなってしまうのは困るんだけどね。仕方な……」

「いつですか？」

店長の言葉を遮って、あやこが質問した。あやこの視線がねむのほうを向いているので、それが店長に向けられた言葉ではないことが判った。そういえば、さっきねむさんが気まずそうな顔をしていたのは、これだったのか。と、草平は思い当たって、あらためて驚いた。

「とりあえず、来月いっぱいまではここで働きます」

「その後は……？」

「実は、就職が決まったんだ。いつまでもフリーターって訳には行かないし」

周りがうまく事情を飲み込めていない中、あやこ一人が興奮状態にあるという状態のようだ。ひよっとしたら、ねむを想うあまり、彼女は『彼がいなくなってしまったらどうしよう』と想像し、その状況をシミュレーションでもしてきたのではないかと思うほど、冷静に受け止めているような感じがした。冷静だからこそ、彼女の気持ちも、好きといえずにそんな想像を働かせているその状況も、なんだか痛々しいように、草平には思えた。

結局、辞めると決めたねむの決意を動かすことが、誰にも出来ないことは明白だった。あやこは、一通り訊くべきことを訊いたあとは、すっかり黙ってしまった。あとは、マサキを中心に、今後の仕事の引継ぎについての話があった。

草平にとっては、皿洗いはかりの仕事から少し卒業できるという意味で、多少のメリットはあるものの、やはり、それよりも失うもののほうが大きいような気はした。何しろ、ここで働き始めてから、ずっと一番頼れると思っていた人がいなくなるのだ。

他のバイトの皆にとっても、そういった心細さはあるのだろう。全員が、意気消沈しているように見える。あやこはその中でひとときわraithめたような顔をしているが、それはまあ仕方がないだろう、と草平は思った。

「じゃあ、そういうわけで、これからちょっと大変になるかもしれないけれど、僕も新しい店のほうがだいぶ落ち着いたから、これからはちゃんとこっちにも顔を出し、大丈夫だから」

皆が小さく、まだ少しだけ腑に落ちない感じを残しつつも、頷いたのを確認してから、マサキはさらに付け足した。

「じゃあ、解散。これから、がんばっていきましょう。よろしく」

嫌な余韻を残したまま、皆が更衣室のほうに帰っていく。その中で、あやこだけが一人、その場に立ったまま動かなかった。草平はなんとなくその様が気になってしまって、だからといって自分も動かないというほどの動機は何も

なかったで、なんとなく速度を緩めただけだった。すると、

「マサキさん！」

随分思いつめた顔で、あやこがマサキを呼び止めた。さすがの草平も、そのただならぬ雰囲気、思わず足を止めてしまった。

「あの、私も辞めます。私も……来月一杯で、ここを辞めさせてください」

そう言っただけ、あやこは走って更衣室のほうに逃げようとした。が、

「あやこちゃん」

声をかけられて振り向いたあやこの肩をポンポンと叩きながら、マサキが言った。

「愛情を示すには、確かに、ある程度がむしゃらさが重要です」

マサキには、とうにあやこの気持ちは知られているようだった。そういうことにどうも疎い草平だって、あやこの気持ちは見ていて判るくらいなのだから、それも当然かもしれない。

「あは、マサキさん、何言っ……」

「だけどー」

笑ってはぐらかそうとしたあやこの言葉を、マサキがその顔に似合わない少し強い口調で封じた。

「忘れるためにがむしゃらになるのは、逆効果です」

「……」

傍で利いていた草平には、なんだかその「がむしゃら」という言葉が妙に印象に残った。

マサキの言葉は、非常に的を射ているような気がする。

第十七章

優希はすっかりうろたえていた。

なにせ、昨日の今日である。

美咲に潔く失恋してくると約束したのは、確かに自分のほうだった。こっぴどく振られて、あわよくば美咲の懷に滑り込んでしまえ、という算段ではあったものの、ぶつかりもしないで終わったなどと言っていた自分がみつともないと思うのも事実だった。

きちんと伝えるべきことを伝えておかなければ、昨夜のチャンスに思わずりさの顔が思い浮かんだように、いつまでも未練がましく気にしてしまうに決まっている。そうだ、今まで瀬名に遊びに連れて行ってもらっているりさの子と知り合ったのに、結局ものにできていないのも、それが原因じゃないだろうか。そうに違いない。

だから、りさと二人で話をするチャンスがあれば、そのときに当たって砕けよう、という決意をしたばかりなのだ。が、青天の霹靂というか何と云うか。

「ゆーっーきー！」

昼休みに、りさのほうからわざわざ優希の教室へ乗り込んでくるなんて、想像もしていなかったのだ。

「久しぶり！ 元気ー？」

りさは、いつにもまして明るかった。

「な、何だよ、突然？」

優希のほうは、驚きを隠す余裕すらなかった。優希の心の準備は、まだ出来ていないというのに、チャンスが向こうからやってきてしまっなんて。

「あのさあ」

意味ありげに顔を覗き込んで話を切り出しりの顔に、優希は妙な緊張感をおぼえて背すじを伸ばす。

「はい」

「優希、私に言つことあるでしょ？」

「えっ！」

何てことだ、と優希は混乱した。

彼女のほうからこんな話を切り出してくるなんて、いったいどこから情報を仕入れてきたのだろう。優希は、告白の決意を美咲にしか伝えていないはずだ。それも、美咲にはりさの名前を出していない。いずれにしろ、昼休みに、しかもみんながいる教室で告白を迫ってくるなんて随分な仕打ちだ。

「そんな急に言われても、俺だって……」

「携帯の番号、変わったでしょ」

「あ？」

「なんで番号変わったって教えてくれないのよ。友達だと思ってたのにさ！」

「ああ……そのことか」

優希は胸をぽつとなでおろした。と同時に、『友達』という単語が妙に重くのしかかって来るような気もした。冷静に考えてみれば、白昼堂々、愛の告白をせつついてくる女なんて、そうそういない。『友達』だというのに、

携帯の番号を教えなかったから怒る、というのは、とても単純明快な理論のような気がした。そして、『友達』だから、りさはわざわざ番号を聞きにきたのだ。

告白するまでもなく答えが出してしまったようなものだ、と優希は思いながら、落胆を悟られまいと平気な顔をして話を続ける。

「二年になつてすぐに番号変えたんだけど。言つてなかったっけ？」

そう言いながら、優希は携帯電話のディスプレイに自分の番号を表示させて、りさに見せる。りさはその番号を見たおりの番号を、自分の携帯電話に憶えさせながら、口を尖らせて文句を言った。

「全然聞いてない。っていうか携帯繋がらないから、わざわざ家に電話までしたのに、ずっと帰ってないと言われるし。一体どこで何やってんの？」

「いや、ワケあって、知ってる人の家にお世話になつてるだけ」

「ふーん……まあ、いいけど。じゃね」

優希の番号を登録した携帯電話を折りたたんで、りさはそのまま、颯爽と教室から出て行こうとした。ふと気がついて、優希は彼女を呼び止める。

「ちょっと待ってよ」

「なに？」

「ていうか、番号聞くだけかよ。わざわざ家まで電話してきて、何か用があつたんじゃないの？」
りさは振り返って、一瞬間を空けてから、少し困つたような顔で笑つた。

「用なんて忘れちゃったよ」

その困つたような顔に思い当たるものがあつて、優希はふとたずねた。

「そういえば、……佐藤と別れたって聞いたんだけど、本当？」

「え？」

りさは、思いのほか驚いた顔をした。しばらく会話もしていなかった優希がそんなことを知っているなんて、想像もしていなかったのかもしれない。しかし、りさの驚いた顔は一瞬で消え、引き続き、いつもの通り元気な顔のりさが、喋る。

「いや、うん、まあね。いや、でも、ふ、振られたんじゃないからね。私のほうからね、ちよっと、す、いや、なんとなく。性格とか、話とか、合わないなあつてずっと思ったりしてたから。だから、その……」

やけに一生懸命で、なぜだか弁解をしているかのように聞こえる、と優希は思った。

「話、聞いてあげよっか。放課後にでも」

「やだ、私、そんなつもりで電話したんじゃない……」

「いいよ、『友達』じゃん。絶対、ちゃんと話聞くから」

「……」

「授業終わったら、中庭の水飲み場あたりで待ってるから、絶対来いよ」

「……う、うん」

半ば強引に承諾させて、優希はりさを帰した。

そして、そのまま自分の席に戻ろうと思って振り返ると、突然巨大な影で目の前をふさがれてしまい、飛び上がるほど驚いた。

「うわっ」

「優希くん」

「何だよ」

クラスメイトの浅見が、いつの間にか背後に立っていた。今の会話を聞かれたか、と思った優希は身構えた。

「なあ、今日部活休みなんだけど、またおまえんとこ、っていうか草平さんの家に、ゆうしんと一緒に行ってもいい？」

この様子を見る限りは、どうやら聞いていないようだ。

「だめ」

「えー、いいじゃん、あの家、なんか面白いんだよ。たまに遊びに行くぐらいいいじゃん」

「絶対だめ」

「なんでだよ」

「今日は、すごい大切な用があるから」

にべもなく、優希は断った。

今の自分のこの勢いがあれば、きちんとりに自分の気持ちを伝えられる。きっと、伝えられる。

優希は、覚悟を決めた。

第十八章

草平がすべての後片付けを終えて、売上の処理をするマサキ店長を残してマルディグラを出たときには、もう十二時近かった。ねむの仕事は、少しずつ他のバイトの皆で分担したり、マサキ店長の権限に戻したりしながら、なんとか引き継いでいる。

その日のシフトでは、バイトは四人入る予定だったが、芹沢音子が急病で休んでしまったために、仕事はずっとてんでこまだった。

（今日は大変だったなあ。）

草平は、大きなため息を吐きながら、マルディグラの裏口から出た。

（藤宮さんとチヨちゃんはこのあと一緒にどこかに行くと言って、後片付けぜんぶ任せて帰っちゃうし。あんじさんは、ちよつと具合が悪そうだったから、無理させられないし。結局俺一人でやるしかないじゃん。おかげで、珍しく皿洗い以外の仕事もいろいろやらせてもらえたから、まあ面白かったけど）

草平は、ぼんやりと考え事をしながら、駅に向かって歩き出そうとした。

すれ違った女性が小さく咳払いをした。それを見て草平が、

（今、風邪が流行ってるのかな……）

などと、呑気なことを思った瞬間だった。

なんと、咳払いをした女性がつつかと自分のほうに歩み寄ってきたのだ。

何だろうと思って、草平は足を止めた。スラリと背の高い和風美人だ。見覚えは、ない。

草平と彼女の視線が絡んだ。

その直後、彼女は決意したように口を開いた。

「あ、う、ここに働いている瀬名くん、今日は来てませんか？」

「あ、瀬名さんなら、今日はシフト入ってないんで——」

そこまで言うてようやく、草平はこの女性はひょっとして、瀬名が自分の家に押しかけることになった原因の人ではないかと思った。もし向こうからたずねてくるなら店のほうに来るだろうとは思っていたし、彼女の声のかけ方に、なにやら事情のありそうな重苦しい空気を感じたからだ。

「あ、今、彼がどこに住んでいるかって、知りませんか？」

彼女がそう尋ねたので、草平はさらにこの女性の正体を確信した。

それにしても、この質問には素直に答えて良いものだろうか。先日の瀬名の様子を見ると、この話についてはまったく触れて欲しくないというような傷つき方だった。二人が会つのは当事者の問題として良いとしても、家に乗り込まれて修羅場を始められるのも、困る。

奈々は、私の目の前で何か言いよんだ表情をしている男の子は、瀬名から自分について何か聞かされているのだろつと、何となく思った。彼ならば、間違いなく瀬名の居場所も知っているはずだということも。

「お願い。彼に会わせて」

「でも、あの……瀬名さんにも瀬名さんの都合ってもんがあるだろうし。今日会えるか解らないじゃないですか」

「じゃあ、居場所だけ教えてください。それだけ解ればいいの。とにかく、会える機会が必要なの。場所さえわかれば、あとは家の前で何時間待ち伏せたって……」

「そんなことされると僕が困ります」

ただでさえ、わけのわからない人間を住まわせていると近所に思われていそうな状況だというのに、自分の家の前で張られたりしたら、たまったものではない。そういう素直な感想が、思わず草平の口をついて出てしまった。

「……どうして？」

奈々は、草平のその言葉の裏に潜んでいる状況に気付いたようだ。

「どうしてあなたが困るのよ？」

「あの、それは……」

「あなたのところにいるのね？」

「……」

「じゃあ、今日ついて行くのはだめ？ もし今日行っても会えなかったら、家の前で張ったりしない。しないで、会う機会を作ってもらえませんか。おねがいします」

懇願する奈々を見て、草平は困惑した。

確かに、姉が帰ってきてしまった今（いくら、姉が気にしないと云ってくれているとはいえ）、いつまでも瀬名を居候させるわけには行かないのだから、ここらへんではじめをつけさせるのも良いのかもしれない。

「……わかりました」

草平は、小さく頷いた。

恋愛経験に乏しい草平には、もはや想像も出来ないくらいの波乱が、今夜、起こるのだろう、と思った。

仕方が無い。草平は、覚悟を決めた。

「じゃあ、一緒に来てください」

草平の足跡を踏むように、あとから二歩くらい遅れて奈々がついてくる。肩が並ばないから、会話をするきっかけもない。

草平は、気まずい気持ちのまま、駅までの道を黙々と歩いて行く。

店から駅に向かう抜け道に、ちよつとした地下道があり、ストリートミュージシャンがいる。フォークギターをかき鳴らして、よく響く声で歌っている。

草平はバイトの帰り、時々このストリートミュージシャンに出くわすことがある。あまり若くないと思うが、本当に音楽が好きそうな感じが伝わってきて、印象は悪くない。歌も、おそらく聴きおぼえがないので自分で作ったものを歌っているのだろうが、ちよつと耳に挟むと、懐かしいような包まれるような感じがして、なかなか良い。

いつもはただ彼の歌を小耳に挟みながら傍を通りすぎてしまっただけだが、今日は初対面の女性（しかも、草平はまだ彼女の名前も知らないままだ）を連れて歩いている緊張感からか、じつと彼の姿を見つめてしまった。目のやり場というものは、出来るだけあつたほうがいい。

よく見ると、ストリートミュージシャンの脇にある開いたギターケースの蓋の部分に、「デモテープ 一〇〇円」などと書いた張り紙があり、中に数本のカセットテープが置いてある。今まで気付かなかった。カセットテープのラベルには、『いつかまた、〇に戻る。ノすてはの』と書いてあるのまで、草平はきちんと見た。何となく、買っても良いような気がしたが、そんなことをしている場合ではなかったので、そのまま素通りして、駅の構内へ入っていった。

改札前で草平が定期を出して自動改札を通り抜けようとしたとき、奈々が草平の腕を強く掴んだ。

「な、何ですか？」

「あの、……どこまでの切符を買えば良いんでしょうか？」

「あ、すみません」

草平は（おそらく緊張のあまり）うつかりしていた事を謝り、奈々に自分の下車する駅の名を伝えた。

「近いんですね」

奈々が、初めて雑談のような口調で草平に話し掛けた。

「バイト先は近いほうがいいですから」

無骨ではあるが、草平も精一杯フレンドリーに答えつつもりだ。奈々も、それに応えるように、さらに話を広げようと努力した。

「ねえ、さっきのストリートミュージシャン、なかなか良いカンジだったと思いませんか？」

草平は、なんとなく安心した。

この女だって、悪人ではないのだ。瀬名はひどい女だとこぼしていたようだけれど、きっと何か事情があるに違いない。だからこそ、わざわざこうして会いに来るのだろっし。

「そうですね。実はさっき、今度あのデモテープ買ってみようかな、なんて思いました」

そう言った草平の顔は、もう緊張などしていなかった。たぶん、この人は大丈夫だ。

第十九章

「じゃあ、何。結局、そのコと上手く行っちゃったこと?」

「へへ、まあ、そういうことです」

ニヤニヤしながら、りさとの顛末を語る優希を、皆がはやしたてた。

ふと美咲と視線がぶつかって、優希は一瞬緊張したが、美咲も心から祝福するような笑顔でいたので、安心した。童貞を捧げられなかったのは非常に心残りではあるが、自分はやはりこうなるべきだったのだ、と改めて思う。

「それにしても、言ってみるもんなんだねえ」

たまたま、あんじと一緒に瀬名のところに遊びに来たあやこも、その話を聞くや否や、切なそうな顔をして、妙にしみじみとため息を吐きながら独り言のようにつぶやく。それを見たあんじと瀬名は、二人して「あやこだって、言ってみればいいじゃん」などとけしかける。優希もつられて言った。

「そうですよ、あやこさん。言わなきゃ何も始まらないですよ。傷つくことを恐れちゃダメです」

あやこは、大げさなため息を吐くポーズをとることで、周りが与えようとしているプレッシャーに素直に応えた。

「私は別に、傷つくことを恐れてるわけじゃないもん」

「じゃあ、もう碎けてもいいからぶつかっていいじゃないですか」

「違うの。わからないの」

「何が？」

「どうやって気持ち伝えられるんだろうって。私、ずっと男女交際を禁じられてた女子高育ちだし、今まで付き合った人は、向こうから言ってきたてくれてたのね。自分から相手に好きな気持ちを伝えたいから、今さら、どういつぶうに言えばいいのか、どういう言葉を選べばいいのか、わからなくて。どうしたら今の私の気持ちを正確に伝えられるんだろうって考え始めると、もう何も言葉が思いつかなくなっちゃう……」

少しの沈黙を挟んで、あやこに声をかけたのは、瀬名だった。

「どんな言葉も何も、無いと思うけど？」

「え？」

「だって、好きなんだろ。好きって言えばいいじゃないの？」

「それでちゃんと伝わるの？ 私は伝えたいことが、いっぱいあるんだよ。ねむさんがいたから今まで頑張ってきたんだよ、とか、ねむさんがマルティン辞めた後もできれば会いたいとか、振られても私は気にしないからまたお店のほう遊びに来て、とか……」

「あんまり考えすぎちゃダメだよ」

あんじが横から口を出す。

「肝心なのは、どんな言葉か、じゃなくて、それがあやこの言葉だったことだと思うよ。それさえちゃんと伝えれば、うまくいくにしろ、いかにないにしろ、ねむさんのほうだって言葉を受け止めて、いろいろと考えてくれるよ、ね？」

「そうですよ！」

突然あんじから「ね？」などと話のバトンを受けてしまった優希だったが、今日はいつにもまして調子が良いので、十歳近くも年上のあやこに対して、説教だって出来る気分だった。

「今回、自分のことでよく解ったんです。一人でいろいろ考えちゃうことにいくら労力かけても、相手には何も伝わらないんですよ。同じエネルギーを使うなら、ちょっと考えが足りないと思われても、もっと外に向けてぶつけちゃったほうが良いですよ。もう、思いつきり、ガツンと！」

話しながらも気分が高揚していくのが目に見えて判る優希に圧倒されながらも、あやこは降参したような顔で小さく笑った。

「うーん、高校生にそんなこと言われるのは、ちょっと悔しいけど。このまえ、似たようなことを、マサキさんにも言われたなあ」

「え、あのマサキさんに？」

あんじと瀬名はひどく驚いた。まさか店長までがバイトの恋の話に口を出しているとは意外だったからだ。

「なんて言われたの？」

「えーと」

あやこは、少し間をおいてから言った。

「『忘れのためにがむしゃらになるのはだめだけど、気持ちを伝えるにはがむしゃらが必要』……みたいな感じだったかな」

「なるほどねえ」

「マサキさん、言ってくれるじゃん」

あんじが、その言葉を噛みしめるように頷く。優希も、自分の言葉がかなりの的を射たものであったことに満足しているような表情だ。

そこへ、美咲がふと「私も」と口を挟んできた。

「私もさ、振られてここに帰ってきたけど、一人でいたらきつとがむしゃらに忘れようとして、余計つらい思いをしてたんじゃないかなって思うの。今、こうやって周りに人がいてくれるから、否が応にもエネルギーは外に向いちゃってるもん。自分の殻に閉じこもる暇もなくて、良かった。内側に向かうエネルギーって、なぜか破壊的な力になっちゃうもんね」

美咲の言葉を聞きながら、優希は自分が昨夜勢いでしてしまいそうになったことでさえ、美咲にとっては救いになっているかもしれないと思いつき、ますます救われた気分になった。

「まあ、家に戻ってみたら、弟が増殖してたのには、ちょっと驚いたけどね」

美咲が付け足すと、瀬名が「はは」と少し乾いたような笑い声を上げた。

ほんの少し、思いつめたような表情をしている。本人は隠しているつもりかもしれないが、美咲はその微妙な表情の変化を見逃さなかった。ふと、この流れは今まできちんと聞けずにいたことを聞くチャンスかもしれない、と思い立って、独壇場に立った勢いでさらに瀬名に言葉を投げかける。

「で、瀬名くんたちは、いつまでウチにいるつもりなの？」

「……え？」

「いや、別に迷惑でもないし、出てけっていう意味じゃないけどね。でも、金銭的な都合で帰る家がなくなっ

ちゃったなんて、嘘なんですよ？」

「えー？ 瀬名くん、そんなこと言ってここに住まわせてもらってたの？」

「いや……うん、まあ」

あんじの茶々が入って、話の腰を折られそうになったものの、美咲は強引に話を続けた。

「ねえ、瀬名くんだって、本当は帰る家があるくせに、何かから逃げてここにいるんですよ？」

問い詰められた瀬名は、うつむいたまま黙りこくってしまった。もっとも触れられたくない話に触れた、とでも言いたげな顔をしている。

誰もが、何を言って良いのかわからなくなった。美咲ですら、そこまで傷ついた顔を見せられると、事情を知らないとはいえ非常に申し訳ない気分になった。そんな中で、ただ一人あんじだけが冷静な顔をして、瀬名にとどめを刺した。

「瀬名くんは、決定的な別れの言葉を聞くのが恐くて、それで彼女から逃げてるんだよねー」

「……」

その場所にはただ妙な沈黙ばかり流れた。それぞれの胸に、それぞれの戸惑いがあって、誰もがいたたまれない気持ちになっていた。

第二十章

改めて考えてみると、自分たちはお互いの名を知りもせず一緒に歩いている。それどころか、自分の家に連れて行くこうとしているのだ。これは滑稽なことだ、と思い、草平はまずは自分から名前を名乗ることにした。

「俺、岡部草平と言います」

奈々も、突然気がついたように、それに応えた。

「私は、岡崎です。岡崎奈々」

改めて自分の名前を言うのは、意外と照れるものだ。奈々は照れ笑いしながら「今さらですけどね」などと
言っ、間を埋めようとした。が、余計な話でごまかすほど、二人は悠長な間柄でもなかった。

「あの、それで岡崎さんは、瀬名さんとはどういう……？」

「あ、ああ、そうですね。何の説明もなしに家に乗り込まれたら、困りますよね」

「そういうわけでもないんですが」

「いえ、いいんです。お話します」

奈々は、一息ついてから喋り始めた。

「瀬名くんは、趣味もたくさんあるし、友達も多いんです」

「はい」

それは、草平もよく知っていることだった。

「そんな彼を見ながら一緒に暮らしているうちに、私はなんだか嫉妬と劣等感のかたまりみたいになっちゃって。だけど、自分が劣等感を感じていることを悟られたら、もっと恥ずかしいって思うから、いつも必要以上に強気な振舞いをしてきたんです」

草平は、チラッと横にいる奈々を眺めた。草平自身は、この女性のことを良く知りはないが、背が高くクールな顔立ちをしたこの人は、確かに強気であるほうが似合っていると思う。

「その日、瀬名くんはバイトに行く直前、急に『ちょっとバイト先で新製品のビールを試飲する会があるから、帰りが遅くなると思う』って言い始めたんです」

「ああ」

草平の三回目の出勤の日のことだ。その日以来、瀬名は自分の家に住み着くようになったのだから、間違いない。

「その言葉が嘘だと思ったわけでも、彼が浮気していると思ったわけでもないんですけど、私以外の予定ばかりいつも入れる彼に、なんか自信が持てなくなって……思わず、『もう一緒にいたくない』って言葉が口について出ちゃって」

草平にはそれが大したことでもないような言葉に思えた。

しかし、それは彼女が抱えてきた不安や劣等感について先に聞いているからなのかもしれない。それらを隠すために強気に振舞ってきた彼女が、いきなりそんなことを言い出したら、弱音というよりも、唐突な別離の言葉に聞こえてしまう可能性のほうが強いのだろう。

「で、瀬名さんは何て答えたんですか？」

「答えた、というか。『どついう意味?』って、すごい恐い顔で……。私も、そんなことを口にしてしまった自分に驚いて、『違うの、悪気があつて言つたんじゃないの』なんて、わけわかんないことを言っちゃって……」

「はあ」

「瀬名くんは、『悪気があるほうがマシだ』って言い残して家を出たつきり、帰ってこなくなっちゃって……」

草平は、思わず立ち止まった。

「まさか、今もそのまま?」

「うん、いえ、あの……。何度も連絡しようかとは思つたんだけど。でも、あんなことを言つた私が、今さら何の用だよ、って感じじゃないですか? きつともう新しい彼女がいて、私のことなんか単なる過去のことにされちゃつてる気がして……」

草平は、大袈裟にため息で奈々の言葉を遮つた。もともと、それほど気の長い性格ではない。あまり他人のことにかまけているのが好きではないので、軽く聞き流そうと思つていたが、さすがに腹が立つてきた。気がつく、草平は奈々に対して強い口調で意見していた。

「あのね、俺は瀬名さんの事情について詳しく知りませんが、あの人がいつまでも俺の家で中途半端な居候生活をしているのは、まだあなたとのことが完全に終わつてないからじゃないんですか? うじうじ言つてる暇があつたら、早く家に来て、何でもいいからケリをつけてください!」

草平はそれだけ言つと、自分の家に向かつて早足で歩き始めた。奈々は、突然口調が激しくなつた草平に啞然としながらも、その勢いに負けて、小走りでその後を追つた。

玄関に並んだ靴を見て、また今日も誰か客を呼んでいるな、と思つたが、この際草平にはどうでも良いことだった。

むしろ、修羅場ならみんなのいる前でやってくれ、というくらいの気持ちだった。

が、皆が集まっている気配のするリビングのドアの前に立って初めて、中の様子がおかしいのに気付く。皆で集まっている割には、いつものようなバカ騒ぎをしていないのだ。明らかにおかしかった。

(ちよっと待って)

奈々に目配せでそう伝えてから、草平はドア越しに中の様子を窺った。人の気配はするようだ。妙に長い沈黙だ。一体何があったのだろう。

草平たちが耳を済ませて数秒。

突然、草平と奈々の耳にドアの向こうで喋るあんじの声が飛び込んできた。

「瀬名くんは、決定的な別れの言葉を聞くのが恐くて、それで彼女から逃げてるんだよねー」

草平と奈々は、思わず顔を見合わせた。

ドアの向こうの沈黙は、ますます重苦しくなりつつあったが、草平のほうは、あんじの言葉で奈々の心が少し軽くなったのが解るくらいだった。

「……突撃しちゃっていいと思います」

草平は奈々に伝えた。明確に聞こえるか聞こえないかというくらいの小声だったが、いずれにせよ、奈々には草平の言いたいことはよく解った。

緊張、という一言では済まされないほどの緊迫感に、内心、負けそうだと、奈々は思った。けれど、私は自分でこのドアを開けなければいけない。心の中で、カウントを始める。

1、覚悟を決めて。

2、息を整えて。

3、で、思い切って奈々はドアを開けた。

「ごめんなさい」

奈々の行動は、本当に突撃といった風情だったので、後ろに立っていた草平は、彼女の影に隠れてほんの少し笑った。

「うわっ」

「誰？」

驚いてのけぞる優希や美咲の奥で、瀬名がさらに大きな驚きのあまり、立ち上がった。

「……奈々……なんでここに？」

奈々の後ろに草平が隠れていたことに気付いたのもあって、周りはようやく状況を察知した。必要以上に驚くこともないし、茶々を入れる必要もない。ただ、『目のやり場に困る』というような言葉も忘れてしまったかのように、皆が二人の成り行きをじつと見守った。

「ごめんなさい。とにかくごめんなさい。あの、もっといろいろちゃんと弁解しなきゃいけないんだけど、もう、何から言えば解らなくて……、でもとにかく本当にごめんなさい。あの、……私は待ってるから、いつでも家に戻ってきて！」

「いや、ちょっと……」

突然の展開についていけずにいるのは瀬名だけだった。動転しすぎて何を言えば良いのかわからなかったし、頭をフル回転させても、今の彼には、とにかく皆の前でこんな話をするわけにはいかない、ということくらいしか思い浮かばなかった。

「あの、まあ、ちょっと二人で話そう」

「あ……ごめんなさい」

奈々も突然我に返って周りを見回すと、思ったよりも人がいたので、急に恥ずかしくなった。

「一つことで、ちょっと話してくるから」

瀬名はいそいそと奈々を連れて外へ出て行った。

「あは。それにしても、瀬名くん、ちょっと泣き入ってたよねえ」

あんじがいつもの調子でケラケラと笑い始めると、瀬名たちの居なくなつた部屋の中に充滿していた緊張感が、一気に解けた。一部始終を見ていただけで興奮したのか、優希が顔を真っ赤にしながら言う。

「解りますよ！ 僕も今日、告白する時マジ泣きそうでしたよ」

「何で？」

草平が訊いた。純粹に疑問に思つたのだが、優希のほうは「なんとなく」というか「などとブツブツ言いながら首を傾げるばかりで、はつきりしない。

「まあいいか」

大した疑問でもなかったたので、草平はそのまま話を流そうとすると、美咲がポツリと言った。

「そういう時泣くの、解るよ」

「うん、解るね」

あんじが美咲に対して応えるその横で、あやこは深く頷きながら、いかにも感慨深そうな顔で言った。

「わかったよ。何を言つか悩んでるよりも、ぶつからなくちゃいけないんだって。瀬名くんの彼女から実践で

教えてもらっちゃた」

草平は、何がなにやらまったく解らなかった。解らないなりに、今日はいいい日なのかもしれない、とぼんやりと考えていた。

何はともあれ、瀬名はその日、帰ってこなかった。

終章

いつもと変わらない授業の合間に、いつもと変わらない昼休みが来る。いつもと変わらない伊勢と連れ立って、いつもと変わらない学食に行き、いつもと変わらない安い定食を食う。随分色々なことがあつた気がするが、結局こうしてやってくる毎日は大して変わらない。不思議なものだ、と草平は思う。

瀬名は当然帰るべき場所に帰ることになったし、優希も瀬名がいなくなればもともと草平の家に居座る理由も無く——とは言っていたが、実際は彼女が出来たから瀬名にくっついていて理由が無いというのが本当のところだろう——、今日の夕方までには、二人とも草平の家を出て行くことになっている。

「そうか、じゃあ、あいつら居なくなるのか」

カレーを食べながら、伊勢が特に何の感傷も無さそうに言う。

「今日帰ったころには、もう荷物もなくなってると思う。まあ、荷物ってほどのものは特に何も無かったんだけど」

草平ですら感傷のようなものを感じないくらいだから、伊勢がそんな平坦な言い方をするのも、無理はない。

話がふと途切れたところを見計らっていたかのようなタイミングで、午前中は違う授業をとっていたヨウヘイが、草平たちと同じテーブルに座って、喋り始めた。

「草平くん、語学のテスト範囲って聞いた？」

「え、もつそんな時期だっけ？」

「先週の授業で言ってたぞ。確か……」

そう言いながら、伊勢が鞆からメモを取り出そうとした、ちょうどその時。

「伊勢くん！ 聞いて聞いて！」

小柄な女の子が、やや興奮気味の笑顔で駆け寄ってきた。

「おう、どうしたの？」

「あのね、神田さん、大学辞めないことにしたみたい。さっき、白橋さんと話してるの、聞こえちゃった」

「マジで？ ……おい、神田さん辞めないんだってよ、良かったなあ」

突然、自分に話を振ってくる伊勢に、草平は多少戸惑って、言った。

「あ、ああ。そうか、神田さん……」

草平が曖昧に答えている間に、女の子のほうは、さっさと話を済ませてしまつた。

「ごめんね、突然。それだけ早く言いたかったから。じゃあ伊勢くん、また後でね」

「おう」

小走りで走り去る女の子を呆然と見送っている草平の横で、早速ヨウヘイが伊勢を小突いて言う。

「ていつか、誰？」

「亜衣菜だよ。語学で同じクラスにいるの、知らない？」

「見たことはある気がするけど。伊勢くん、あの子と仲良いの？」

「うん。ていつか、付き合ってる」

「え？」

草平は、珍しく大きな声を出すほど驚いた。ヨウヘイのほうは、「やっぱり」とでも言いたげな顔をして、「いつから？ どういうきっかけで？」と矢継ぎ早に質問し、二人の仲について詳しく聞きだそうとした。

ヨウヘイにつつかれて、少しずつ「前から気になってたんだよ。今時めずらしくきれいな黒髪しててさ、なんか神秘的なところがあって……」などと話し始めた伊勢を横目に、草平はぼんやりと物思いにふけた。

このところ、やたらと他人の色恋沙汰に振り回されてばかりだったと、草平はまず思い当たった。

瀬名や優希が突然自分のところに転がり込んできたのも、居なくなっただけの姉が帰ってきたのも、店で痴話喧嘩をしていった橋も、ねむが店をやめるといつて必死になっていたあやこも、大学を辞めるの辞めないのと一悶着あった神田と白橋も。みんな自分のことではじめて、草平を振り回してばかりだった。

恋愛なんて所詮誰だって経験するようなものなのだと思うえば、それは日常茶飯事で、いちいち珍しがるようなことではない。あくまで個人的な話なのだから、他人を巻き込む必要も無い、とずっと思ってきた。

だのに、皆、自分の中だけでは上手く折り合えずに、逃げていた、のだと思う。厳しい現実を見ないように、草平の家に集まっていたかのように見える。それで、正直なところ、初め草平は、それを少し煙たがっていた。

だいたいそれは、恋愛の話に限らない。生きるということは、それだけでひどく個人的なものであり、それぞれの場所ですぐにやるべきだ。

しかし、実際には他人を巻き込んだり、振り回したりしながら、それぞれが進行していく。そんな中、草平は今まで、巻き込まれたり、振り回されてばかりいた。適当にあわせては来たけれど、それは基本的に迷惑なことでもあった。だから、草平は自分から積極的に他人に関わっていくのは、少し面倒くさいような気がしていたのだ。ついこの間まで。

けれど、今は少し考えが変わった。

一つ解決すればまた一つ。また身近なところで、知らないうちに新しい恋愛沙汰が生まれている。

伊勢は自分を巻き込むだろうか。伊勢のことだから、なんでも自分で解決しそうではあるが。やはり自分もそれに多少は巻き込まれるだろうし、巻き込まれても良いのではないかという気持ちさえ、今の草平にはあるのだった。

「あ、橘さんだ。今日も可愛いなあ」

そう言って食堂の入り口に目をやったヨウヘイにつられて、思わず草平も彼女のほうを見た。

「騒いでる割には、橘さんに声かけないんだな」

草平が言うと、ヨウヘイは「だって、リスク高いよー」などと言い訳する。

確かに、自分のほうから他人に関わっていくことにはリスクもあるし、要らないエネルギーまでかかる。それでもなんとなく、関わってみたいと思う人がいる。

やたらと辛そうな恋をしているように見えた彼女は、自分が声をかけてやることで、なにか救われないだろうか。自分があの男の代わりに彼女と恋愛をしたいというようなことでは必ずしもなく、ただ話を聞いてあげたりすること

で、何か力になれることもあるのではないだろうか……。

そこまで考えて、草平は自分のその思考に驚いてしまった。

（ここ最近の生活のせいで、他人の恋愛に振り回される癖がついてしまったのかもしれない……）
そう思い当たって、心の中で苦笑した。悪くは無い苦笑だと思った。

午後の授業が終わって家に帰ったら、また元のような生活が始まる。姉は戻ってきているが、基本的にお互い干渉することもなく、今までやってきた。当然のことだ。それは、誰のものでもない草平自身の生活なのだから。けれど、気が向いたら、時々は干渉してみるのも、面白いかもしれない。

「じゃあ、俺が橘さんに声かけてみようかな」

草平が言うと、伊勢もヨウヘイも、二人して何秒間か手の動きを止めて、ひどく驚いていることをアピールした。その妙な間に絶えられず、草平は「まあ、気が向いたらね」と言って、笑っておいた。

あとがき

普段はあとがきなんて書かないのですが、今回は企画ものということで、セルフ総括みたいなのをやってみます。

まずは、こんな無鉄砲な企画にお付き合いいただき、キャラを貸してくださった38名の中の人たちに多大な感謝を。そして、にもかかわらず諸事情により作品のアップに時間がかかってしまったことに謝罪を。

熱も冷めるぞつつ時間の経過っぷりで、10万ヒットの企画というタイムリー的な美味しさも逃してしまいましたし、応募してくださった方のサイトが閉鎖したり休止したり移転したり、という状況の中、少しは焦ったりもしましたが、もともと企画が無謀なので、とにかく最後まで書くことに意義があると考え、焦っても仕方ないサと自分を励ましながら、ここまでたどり着きました。

今回の制作過程としては、まずキャラが揃った時点で、大体年齢別にわけて、いくつかの舞台を決めて、その人物相関図というものを作りました。こんなのです。はつきりいつてこの作業がいちばん楽しかったし、やりがいがありました。こんなことをやりながら、「じゃあ、人と人との関係というものをテーマにしようかな」とぼんやりと思いつつ書き始めました。

自分の中から生まれてこないキャラ想定で書くのはとても楽しかったです。応募してくださった38人の中には、何度も一緒に遊んでいる友達から、以前からサイトを拝見させていただいていた人、また、本当にメールに書かれただけしか情報のない人もあり、そういう格差も含めて、遊びを多く残したマジメな作業となりました。

ストーリーの要となったのが、(一)あまり自分から他人には興味を持つことが無い草平くんが人との関係について考える物語、瀬名くんと別れたくないのに別れると言ってしまった奈々さんが素直に瀬名くんに会いに行くようになるまでの物語、とにかく童貞を卒業することで頭が一杯の優希くんが意外にもブラトニックな自分に目覚めてしまう物語、という三本柱で、それにいくつかの関係性を加えることで、3つの物語が交わるように書いたのですが、書いているうちに本筋じゃないところに思わず力が入ってしまったり、そのために書くこうと思っていたことが上手く書けなかったりということが多々ありました。また、物語を書くことでいっぱいばいばいで、表現や手法にまったく構う暇がなかったのも、大変お恥ずかしい。正直、読みにくい部分もかなりあるのではないかと思います。

そんなわけで、作品についての悔いはたくさん残っていますが、今回はこれまで。このような企画を再びやるかどうかはわかりませんが、今までだったら「絶対できない」と思っていたことをやったということは、少なからず今後の活動のバネにはなると思います。きつと、きつと。だから、それでいいのです。

ちなみに、タイトルとなっている「Peach Time」は、私の敬愛する岡村靖幸さんの曲から頂いておるわけですが、その岡村靖幸さんがこの8月に活動復活ということで、もういつそトリビュート小説！（というにはあまりにもおこがましいが）くらいの気持ちで、間に合わせるように書き上げました、という裏もあつたりします。

ちなみに、人の台詞や設定などにもこの歌からのエッセンスを散りばめており、歌を聴いてみると、「あ、こんなところに岡村節が！」みたいなのもあつて、楽しめるかもしれません（怒りたくなるかもしれません）。